

第六章

講演とまちづくり

— 投稿記事・講演記録等 —

この章は、紀の川市に赴任してから様々な媒体に投稿した記事や講演記録を整理してご紹介したいと思います。

(一)『「紀の川のほとり」で』『合併市』紀の川市の現場から』は、地域づくり情報誌『かがり火』発行人の菅原歓一さんから、合併市の課題を書くよう依頼されたものです。私自身も市町村合併に関する問題意識は強くもっていたので、いい機会と考え、合併にかかわった様々な立場の人に取材して書き上げました。

(二)『「ため池災害緊急レポート」』は、平成二〇年五月に体験したため池災害について『農村振興』という専門誌に投稿したものです。この記事は、「ため池の決壊の危機をいかにして回避したかについて、その取組が臨場感をもって報告されている。地域住民の生命財産に関わるため池災害の対応の難しさが

伝わってくるとともに、災害を教訓とした危機管理マニュアルなどを検討する際に大いに役立つ知見を含んでいる」という理由で、平成二〇年度の『農村振興』優秀報文の表彰をいただきました。

(三)『「棚田の起源は紀の川市？」』は、平成一九年五月の早稲田大学名誉教授・中島峰広さんの講演会の内容を、(四)『「棚田のルーツを探る」』は、棚田学会と紀の川市、紀の川市教育委員会が共催した平成二〇年五月のシンポジウムの内容を整理したものです。棚田の起源は本当に紀の川市なのでしょうか。棚田と紀の川市の関係を解き明かしていく読み物としてお楽しみください。

(五)『「ふるさとをください」の「ふるさと」』は、「は、紀の川市を舞台に撮影された映画『ふるさとをください』の試写会への誘いのために書いたものです。エキストラ等で地域をあげて映画づくりに協力したのは楽しい思い出です。今でも粉河とん

まか通りの楠酒店には、映画で使われた「紀ノ川屋」という看板が掲げられています。

(六) 『あら川の桃』の『あらかわ』とは?』は、あら川の桃振興協議会という「あら川の桃」の生産者団体で行った講演会の記録です。古事記や日本書紀にも明記されている「あらかわ」という地名。その由来からひもとく「あらかわ」の話をお楽しみみてください。

(七) 「地方分権の観点からの華岡青洲先生の偉業とは?」は、「青洲友の会」という青洲の里の親睦団体での講演をまとめたものです。紀の川市の誇る華岡青洲の業績を、地方分権という観点で再評価してみました。

(八) 「EUの農村振興施策リーダープラス」と
(九) 「日本とドイツの農業環境政策」は、平成一七年当時在籍していた国土交通省で、制度研究を命ぜられてドイツに出張した成果をもとに構成して

います。それぞれ農業農村工学会京都支部、和歌山県有機認証協会という堅い場所で講演した内容をまとめたので、少々とつきにくいかもしれませんが。

(十) 「ほ場整備のススメ」は、紀の川市農業委員会、紀の川市の農業振興について講演した内容をまとめました。ほ場整備は紀の川市の農業振興のかぎとなるため、今後ともその推進を図ることが重要です。

(十一) 「紀の川市の森林の価値とは?」、(十二) 「紀の川市の『光』とは?—紀の川市の観光を考える—」、(十三) 「紀の川市商工会に期待すること」は、それぞれ那賀広域森林組合・紀の川市観光協会・紀の川市商工会の事務局で講演を行った際の記録です。農林商工部長として林野行政、商工観光行政に携わることができたのは、私のこれからの大きな財産になると思います。

(十四) 「きのかわー人と水の物語—」総括にか

えてゝ」は、紀の川市の「人と水の歴史」を市内の中学生に勉強してもらいたいという想いから企画した副読本について解説を加えたものです。紀の川市に赴任してから、農林水産省出身という珍しさもあってか、『かがり火』はじめ様々な紙媒体への投稿を依頼されました。また、市内外の様々な会合で講演する機会をいただきました。

本章で取り上げた講演会では、かなり無謀な講演内容の設定をしました。たとえば、あら川の桃振興協議会で「あら川」の起源について、青洲友の会で「華岡青洲」について話すなど、専門家に向かって専門の話をしているような感があります。

ただ、私も講演をする前には、旧町の町史を読み込み関連する本も収集するなど、準備にはかなりの時間をかけました。桃源郷や春林軒など講演の題材にする場所には必ず足を運び、実感として「地域」を感じるように努めました。

講演そのものは冷や汗ものでしたが、講演準備を通して紀の川市の歴史や風俗の素晴らしさを学ぶことができました。

何よりも講演会にきていただいた方々と、紀の川市の歴史などについて語り合い、心の深いところで交流ができたと思います。これは、その後の仕事面でも大変貴重な財産となりました。

なお、投稿した『かがり火』と『農村振興』には、転載許可をいただいています。

また、(三)と(五)にある『理事通信』は、農林商工部の職員向けに不定期で発行していた読み物です。

(二)から(十四)まで、それぞれ投稿・講演した日時も対象者も違うので、一連の読み物としては、若干戸惑いもあるかもしれませんが、お許しいただければ幸いです。

（一）『紀の川のほとりで』

～「合併市」紀の川市の現場から～

◆『紀の川のほとりで』

「紀の川は今日も流れ

いくつもの川を集めて

君はまだここにいる

僕たちの心の中に…」

平成二二年二月一四日、紀の川市ピンクリボンキャンペーンの一環として行われた講演会で、地元（地元の）の小学生が歌ってくれた『紀の川のほとりで』という歌の一節です。母なる紀の川の悠久の流れなどを題材にしたこの歌に、紀の川市の子ども達が命を吹き込んでくれました。

私は、赴任先や仕事で深い縁のできた土地で歌つ

くりをすることをライフワークとしています。鹿児島では『からいも畑に陽が落ちて』という村おこしの歌を作り、宮城では『ふゆみずたんぼの歌』という環境にやさしい農業のテーマソングをつくりました。『紀の川のほとりで』は、紀の川市が誇る医聖・華岡青洲が、世界で初めて全身麻酔薬による乳がん摘出手術に成功したことなどを踏まえ、乳がんを乗り越えて強く生きていこうというメッセージを織り込んでつくった歌です。市内の乳がん検診受診率を上げ、乳がん撲滅を図る「紀の川市ピンクリボンキャンペーン」のテーマソングにさせていただきました。『ふゆみずたんぼの歌』も、宮城の小学生にレコーディングしてもらったのですが、『紀の川のほとりで』も、青洲先生地元（かみなて）の上手小学校の生徒さんをお願いして講演会で歌ってもらったわけです。



地域づくり情報誌『かがり火』

地域づくり情報誌『かがり火』編集長の菅原歓一さんから「合併市」の課題を書くよう依頼され、合併にかかわった様々な立場の人に取材して原稿を書き上げました。

◆「果物王国」紀の川市

紀の川市は、和歌山県北部に位置する人口七万人の市です。県都の和歌山市に隣接し、大阪府とも境を接していて関西国際空港に車で四〇分ほどです。基幹産業は農業で、はっさく、いちじく、桃、柿、キウイフルーツが全国有数の生産高を誇るなど「果物王国」とも言うべきところです。

私は、平成一九年四月、農林水産省から紀の川市に赴任しました。いったん国へは辞表を出しての出向ということになります。ひそかに運命的なものを

感じたのは、まだ入省間もない頃、鹿児島県末吉町役場への市町村交流を経験していたので、市町村の現場に出るのが二回目だったことと、末吉町が平成一七年七月に隣の二町と合併して曾於市となっていたのと同様に、紀の川市も平成一七年一月旧那賀郡五町（旧打田町、旧粉河町、旧那賀町、旧桃山町、旧貴志川町）が対等合併（新設合併）してできた「合併市」だったことです。

もともと、『かがり火』と同様、私も「平成の大合併」についての関心は強くもっていました。末吉町のかつての仲間たちからは合併の選択は苦渋のものだったということを聞かされていましたし、農林水産省の補佐時代に交流のあった棚田地域の方々の活動が、市町村合併の結果、明らかに失速してしまった状況を目の当たりにしていました。

紀の川市という合併したばかりの市の現場に赴任し、職員として自ら合併市のまちづくりに参画でき

るチャンスを与えられたわけですから、ありがたいという思いと併せて、強く責任を感じたところです。

◆離婚できない結婚？

前述の通り紀の川市への赴任前は合併について否定的な見方をしていたのですが、赴任して二年たち、市の行政に携わる中で、合併を肯定的に捉えていく必要もあると考え直すようになりました。地方交付税の削減や合併特例債という国からの財政的なプレッシャーが紀の川市の合併の直接の動機付けになったことは間違いないのですが、若い市民や市職員を中心として「合併してよかった」と肯定的な意見を持つ人が少なくないのです。

今回、本誌発行人の菅原さんから「合併市町村の課題」について寄稿の依頼があり、自分の考えをまとめるいい機会だという思いもあって快諾しました。ところが、ところが、七五〇〇字もの原稿をせさせ

と書き上げて送ったものの、菅原さんから原稿の全面書き直しを命ぜられてしまいました。「田中さんは、本当は合併の否定論者なのに立場上否定できないので、歯切れが悪くて面白くない」とのこと。

私がもともと合併の反対論者であったことを否定するものではありません。曾於市の住民にしても紀の川市の住民にしても、できることならば合併したくなかったと思います。誰よりも私自身が、末吉町での青年団長経験なども踏まえて、小規模の自治体の良さを十分に理解しています。

ただ、菅原さんにも『かがり火』の読者にも分かっていたいただきたいのは、紀の川市にとって「合併」は既に選択してしまった事実であって、経緯はどうであれ、合併を否定することは自分自身を否定するに等しいことなのです。合併した選択は後戻りできないものではないし、何よりも、合併を選択しなかった市町村に負けたくないという思いも強くあります。

例えて言えば、「離婚できない結婚」をしたといったところでしょうか。

もちろん、紀の川市の合併によって傷ついた人もたくさんいますし、いまだに一部の市民から「合併しないほうがよかった」という声があるのも事実です。しかし、住民には目につにくい「合併の大きな効果」があることは、分かってもらいたいと考えました。そういった観点から書いたものだとこのことで、お許しいただきたく思います。

◆このままでは、とてもやっていけない

紀の川市は、なぜ合併という選択をしなければならなかったのでしょうか。そもそも、各町には、それぞれ地域で築き上げてきた個性・歴史があります。お互いに隣町に負けないようにと張り合ってきたわけですから、突然共通のアイデンティティーを持つと言われても、容易なことではありません。でもな

ぜそういった困難を乗り越えて旧五町が合併しなければならなかったのでしょうか。

理由は単純といえば単純で、地方交付税などが削減される中、「このままでは、とてもやっていけない」という財政上の課題が合併の大きな動機付けになったようです。

実際、五町の財政状況を合併した場合としない場合に分けてシミュレーションしたところ、合併しない場合は建設事業などを抑制しても、平成二〇年度には基金（預金）が底をつく非常事態にありました。一方、合併した場合には、合併による経費の削減や合併特例債など特例措置の効果により財政的に非常に有利となるわけです。

もちろん合併についての不安もありました。合併前、五町合併に関して町民に対してアンケートが行われています。合併についての不安の第一は、「きめ細かな行政サービス」が難しくなるのではという

ことでした。その他、役所への距離が遠くなり不便になるのではということや、公共料金などの増加についての懸念も示されました。

また、合併の実務を進める中で大きな問題となつたのは、市庁舎の位置と各町の財政上の格差でした。これは対等合併の市町村の場合、特に問題になることが多いようです。ただ、財政状況のよかつた旧打田町が地理的にも中心だったことから、市役所本庁を旧打田町役場に設置するということで合意することができました。

◆市民には見えにくい「合併の効果」

合併の動機付けが各町の財政上の苦境だったことは間違いないませんが、合併によって市民には見えにくい「合併の効果」が出てきていることも事実です。思い付くまま、四点ほど列挙してみたいと思います。

第一は、旧五町職員せつさたくまの切磋琢磨です。旧五町の対等合併だったということもあり、職員がいい意味で競い合い、刺激しあつて、結果として市民サービスの向上につながっています。市民から「合併して役場の職員の対応がよくなった」という声をよく聞きます。

第二は、行財政改革の進展です。合併を機に市役所の行財政改革が一挙に進みました。十年間に約七〇〇人の職員を約五〇〇人に減らす計画をたてるとともに、緊縮財政方針を打ち出し、不必要な経費を削減しています。また、市議会議員も市発足時には法定の三〇人からスタートしたのですが、平成二年一月以降は、二四人定員とすることが決まっています。

第三は、過去の負債の精算です。旧町の土地開発公社の中には、バブル期に高い土地を買い取ったまま塩漬けとなり大きな負債を抱えているところもあ

りましたが、合併後の最重点施策として公社の財政健全化を進め、効果を上げつつあります。自治体財政健全化法が施行され公社や第三セクターなどの連結決算が厳しく査定されるようになる中で、合併がなければ旧町の公社の一部は破産状態に陥っていたでしょう。

第四は、重点投資が可能になったことです。例えば、平成二一年度新規予算で、雇用確保の観点から新たな工業団地造成を打ち出しましたが、これも

広域合併をして重点投資が可能となったおかげです。その他、中国の濱州市や韓国^{（ソウル）}の西帰浦市と行っている国際交流事業も、合併しなければ取組自体難しかった

市民には見えにくい「合併の効果」

- ①旧5町職員の切磋琢磨^{せつさたくま}
 - ②行財政改革の進展
 - ③過去の負債の精算
 - ④重点投資が可能となったこと

市町村合併を選択した以上、合併のマイナスよりもプラスを見ていくことが大切だと思います。

でしょう。小中学校の耐震化についても、合併特別債を有効に活用し、順次、校舎の補強や建て替えを進めています。

◆市民主体のまちづくり

紀の川市内で、合併前後から市民主体のまちづくりが展開されています。紀の川市のまちづくりをいくつかご紹介させていただきたいと思います。

①廃線の危機を乗り越えて

貴志川線貴志駅の猫の駅長「たま」ちゃんと言えば、全国ネットのテレビで紹介されることも多く、読者の中でご存じの方もおられるのではないのでしょうか。実は、この線路も一時期廃線の危機にありました。平成一六年に貴志川線の廃線が発表されたとき、「貴志川線の未来を つくる会」が結成され、地域で存続活動を繰り広げた結果、和歌山電鐵貴志川線として再出発することとなったのです。和歌山



貴志駅のスーパー駅長
「たま」ちゃん

和歌山電鐵貴志駅のスーパー駅長「たま」ちゃんは、今や全国区の人気者です。廃線の危機を乗り越えて、市民と行政が一体となった働きかけが、大きな成果をもたらしました。

電鐵では、「いちご電車」「おもちゃ電車」に続き、三月二日「たま電車」も運行を開始し、乗降客数も確実に増えています。駅前では「いちご自転車」のレンタサイクルの貸し出しもはじまっていて、住民主体のまちづくりの成果が実りつつあります。

なお、貴志駅のスーパー駅長「たま」ちゃんは、日曜日が休みとなっていますので、あしからず。

② 粉河商店街を彩るモニュメント

西国三十三カ所観音霊場・第三番札所の粉河寺のことをご存じの方が多いと思います。この粉河寺と

粉河駅の間にある粉河商店街、通称「とんまか通り」

では、後継者不足などにより閉店する店も多く活気が失われつつありました。こういった状況を打破し、駅から粉河寺への参拝客に商店街を歩いてもらうにはどうすればいいのか。商工会の呼びかけにより地域の商店主を中心に実行委員会を立ち上げて検討を重ねた結果、商店街を彩る三〇基のモニュメントがつくられることになり、平成二十二年三月に完成しました。モニュメントには粉河寺の創建の経緯が書かれた「粉河寺縁起絵巻」が転写され、駅から順に見て歩くことができます。千手観音の化身であるという「童男さん」の像もシンボルとして二体設置されています。ぜひ、粉河の「とんまか通り」に足をお運びください。

③ 華岡青洲の生誕地から発信する健康バイキング

華岡青洲は、文化元年（一八〇四年）、全身麻酔薬による乳がん摘出手術に世界ではじめて成功した

偉人です。青洲を顕彰する施設として「青洲の里」が平成になってから建設され、運営されてきました。しかし、開館当初と比べて入場者数が伸び悩んできた中、新たな取組にチャレンジしようとするスタッフで検討を重ね、平成一九年三月「健康バイキング」に取り組むことになりました。地元産野菜を中心としたヘルシーなメニューが話題となり、春夏のピーク時には常に満席状態になるなど人気を呼んでいます。医と食の連携という観点からも注目を集める取組です。

④地産地消の拠点・めっけもん広場

紀の川市には、日本一の農産物直売所であるＪＡ紀の里「めっけもん広場」があります。平成一二年の開設以来、販売高は順調に伸び、全国有数の売り上げを達成しています。農産物一つひとつに農家自身が値段付けをして、販売コーナーでの陳列も農家自身が行うなどの工夫があり、新鮮な地元産の農産

物が安価で買えると評判を呼んでいます。大阪や神戸からの来客も多く、週末は駐車場が常に満杯の状態です。平成二二年四月からは、地元産の野菜や果実を味わえる「イートインコーナー」もオープンする予定です。

⑤「食育のまち」紀の川市へ

紀の川市では、県下一位の農産物の生産高を誇るだけでなく、環境保全型農業など安全・安心な農産物づくりに取り組む農家もたくさんいます。また、学校給食に地場産の農産物を取り入れるなどの取組も熱心に行われてきました。このように「食」に対する関心が市民一般に高いことから、平成二〇年に「紀の川市食育推進計画」を策定して、市を挙げて食育を推進しているところです。

今後、めっけもん広場や青洲の里などを拠点として、「食育のまちづくり」を展開していきたいと考えています。

◆行政に頼らない地域づくりへ

考えてみれば、行政に頼らない市民主体のまちづくりを進めてきた地域では、行政が合併しようがしまいが、さほど影響は受けません。市町村合併は、各地域が行政依存から脱却するチャンスともとらえられます。

ただ、私が心配しているのは、合併による市の財政改革を急ぐあまり、旧町で培ってきた地域の文化が廃れてしまうことです。例えば、小中学校の統廃合は効率的な投資という観点からは必要なものですが、小中学校が地域文化の拠点として機能してきたという面もあります。このため、統廃合を行う場合には、地域の意見を尊重するのはもちろんですが、廃校となった後の校舎の活用をどうしていくかということも併せて検討しなければなりません。

また、地方への権限委譲の名の下に、県から市に

多くの事務が移管されようとしています。もともと「このままではやっていけない」ということで合併したわけですし、職員も減らさなければならぬ中、紀の川市のような地方の新設合併の市には新たな業務に取り組む余裕はほとんどありません。都道府県と市町村の関係の見直しは必要なことですが、市町村への業務の一方的な「押し付け」にならないよう配慮してほしいと思います。

◆ふるさとづくりへの「志」

紀の川市は、紆余曲折はあったものの、市長の指導力、市議会議員の協力、市職員の意識の高さなど様々な要素がかみあい、合併がうまくいったといえます。しかし、本格的なまちづくりはこれからです。合併にいたった「初心」や合併にともなう「痛み」を忘れることなく、新しい紀の川市づくりにチャレンジしていかなければなりません。よりよい

ふるさとをつくるためには、市民一人ひとりが高い「志」をもつことが肝心ではないでしょうか。

私自身も、紀の川市の職員提案制度に挑戦し、ブログ形式で市政を分かりやすく情報発信する市職員ブログ「紀の川ぶるぶる通信」を立ち上げることができました。農林商工部の職員の協力を得て、気軽な読み物として人気を集めています。ぜひ、いちど、<http://blog.murabio.jp/purupuru/>にアクセスしてみてください。

合併したばかりの紀の川市の課題は山積していますが、私は、国や県の立場ではなく、より現場に近い市町村の立場で農業をはじめ様々な課題に携わることができ、大変やりがいを感じています。このような貴重な機会を与えていただいた中村愼司市長はじめ紀の川市、紀の川市議会の方々に感謝申し上げます。筆をおきたいと思います。

（平成二年三月『かがり火二二九号』）

※『かがり火』投稿記事は付属CDにもPDFを添付していますので、ご覧ください（CD資料編①）。

(二) ため池災害緊急レポート

～和歌山県紀の川市の現場から～

「桃山町調月^{つかつき}地内のため池二箇所の堤防が決壊寸前です。避難勧告の発令の検討をお願いします」

平成二〇年五月二五日午前六時過ぎ。現場からの電話に強いあせりを感じた。未明から警戒態勢を敷いていたが、まさか、ため池災害という事態に遭遇するとは思っていなかった。人命第一である。



専門誌『農村振興』

専門誌『農村振興』に投稿した「ため池災害緊急レポート」は、平成20年度の優秀報文の表彰をいただきました。

まずは、避難勧告の発令の範囲を決定しなければならぬ。ため池が決壊した場合の影響範囲を示す「ため池ハザードマップ」が整備されていれば、すぐに範囲は確定できる。だが、今年度、市の単独予算でマップの調査費を計上したばかりだ。幸い、地元出身の課長が華麗な手さばきで地図の色塗りはじめた。地元の地形や水路、家屋の状況が全て頭にはいつていなければできない名人芸だ。あつという間に地図が完成、六五世帯の避難勧告の範囲を確定することができた。市長の認可を得て、避難勧告の発令の準備を進める。同時に、地元消防団によるポンプ排水の手配、ため池下流域の国道、県道の通行止めの協議も行う。

午前八時一〇分、避難勧告発令。関係部局と協議し、防災無線で二回周知するとともに、市の車で個別訪問を行い周知の徹底を図った。避難所に指定さ



堤防が決壊寸前になったため池

紀の川市が合併してからはじめての大きなため池災害。市をあげて災害対応した結果、地元から「合併して本当によかった」という評価をいただきました。

れている調月小学校の体育館には保健師も配置し、避難される住民の健康面での配慮も万全を期することにした。地元の市議会議員から何度も電話がか

かってくる。現在の市の対応状況について、丁寧に説明することを心がけた。

地元消防団のポンプだけでは、ため池の水位は容易に下がらない。雨も降り続けている。副市長の指示により、国土交通省の排水ポンプ車を要請することにした。実は、数年前、国土交通省河川局補佐時代に排水ポンプ車の担当をしていた。通常は河川の側に固定される排水ポンプを可搬式（かはんしき）にしたもので、その汎用性の高さから、全国の水害時に大活躍している。ため池のような河川と切り離された場所の災害で出動してもらえるか、若干不安だったが、和歌山河川国道事務所の所長に事態の緊急性を理解してもらい、すぐさま出動許可がおりた。到着した排水ポンプ車の重量は六・二トン。近くで見ると戦車のようだ。午後二時半、クレーンでため池におろし、排水を開始した。排水先の水路の能力の関係上、一分間三〇トンの排水能力をフルに活用できないのが

残念だが、水位の減りはずいぶん加速した。何よりも、地元の人たちが、排水ポンプ車の圧倒的な存在感に「安心」を感じてくれたようだ。

午後になって仁坂吉伸知事が駆けつけ、ため池の現場とあわせて避難所も訪問してくれた。新聞記者の質問に「この地区だけに限らず、和歌山にはため池が多い。優先順位をつけて早く何とかしないと」と答えるなど、ため池防災対策の重要性を改めて認識してくれたよ

うだ。国会の石田真敏議員、西博義議員、世耕弘成議員や地元の県会議員も駆けつけてくれた。地元にとっては心強い



排水ポンプ車

国土交通省の排水ポンプ車は6.2 t。まるで戦車のような存在だ。ただ、その圧倒的な存在感に地元の人たちは「安心」を感じてくれたようです。

限りだ。

夕方になって、中村愼司紀の川市長を本部長とする現地対策本部を開催し、今晚の体制について検討した。雨もあがり水位も減少しつつある。避難住民は、朝から慣れない避難所で疲労している。できれば避難勧告を解除したい。しかし、ため池の水位はまだまだ高い。万一破堤した場合、人命にかかわる災害となることは明らかだ。避難勧告の継続を決定し、市長と一緒に避難所に向かった。現状を正確に伝えることに努めたが、「避難を継続してほしい」と住民に伝えると落胆する様子がありありと分かった。避難勧告の判断は、市町村にゆだねられている。勧告の発令の判断だけでなく、解除についての判断も本当に難しい。

国土交通省と地元消防団によるポンプ排水は、夜を徹して続けられた。国土交通省は照明車も配備してくれた。本当にありがたい。農地課職員によつて

定期的にため池水位の観測を行うが、じわじわと水位は下がってきている。翌朝午前六時二〇分、現地対策本部が再び召集され、避難勧告の解除を決定した。水位が下がり破堤する危険性は低いと判断したためだ。ただ、完全に危険な状態を脱するためには、ため池の水を完全に抜く必要がある。ポンプ排水は継続して続けることにした。

五月二六日午後五時四五分、二箇所のため池がほぼ空になったところで、現地対策本部を解散。翌五月二七日早朝から、仮復旧作業を開始して、破堤寸前となった堤防を切り崩して土のうを積み上げ、当面の対策を講じる。その日のうちに近畿農政局の査定官の視察も受け、災害対策についてアドバイスももらった。

当面の危険な状況を脱した後は、ため池の復旧を急いで水の必要な夏期に備えなければならない。六月上旬までには、土のうや蛇かごじやによる応急復旧に

より、一箇所のため池は貯水できる状況を回復した。本格的な復旧は、災害査定を受けた後で、秋以降に行う予定である。

紀の川市は、平成一七年一月に五つの町が合併してできた人口七万人の新しい市である。合併して以来最初の大災害となった今回、不慣れな部分もあったが、地元や消防団、県・国の協力を得て、中村市長をはじめ市役所職員が一体となつて災害対策に当った。地元からは、「合併して本当によかった。旧町では、ここまでの機動的な対応は期待できなかっただろう」という評価もいただいた。ほぼ二晩徹夜状態が続いたが、そのような市民の声は、市職員にとつて疲れを吹き飛ばすかけがえのない「宝物」だ。

紀の川市内には、七八六箇所のため池がある。今回のため池災害を教訓として、ため池防災対策の必

要性が改めて認識されることとなった。こういった状況を受け、六月九日、市内の関係者に対して、次の事項に配慮してほしい旨の通知を発出した。

①底樋、サイホン、余水吐、水路の点検・掃除及び法面の草刈等、ため池の日常管理に努めること

②大雨が予測される場合には、事前にため池の水位を下げることを検討すること

③ため池災害の危険性について、下流域等の関係住民に周知すること

④ため池の日常管理等について、農地・水・環境保全向上対策、中山間地域等直接支払制度等の補助制度の活用も可能となっているので検討すること

この通知を受け、知り合いの区長さんが、早速、動いてくれた。農地・水・環境保全向上対策の一環として、地域のため池の草刈りを住民総出で行って

くれたそう。農村振興局補佐時代、制度の創設に若干ながらもかかわった人間として、嬉しい限りだ。

今回のため池災害は、多くの教訓を残した。農家の高齢化が進む中、ため池の日常管理が行き届いていない。一方、都市化が進み、ため池の堤防ぎりぎりまで家屋が建設されている。堤防強化対策などのハード整備を着実に進めていく必要があるが、市町村財政は厳しく予算に限りがある。ため池の日常管理の強化や危険情報の周知などソフト対策を強化していくことが重要だ。特に、ハザードマップの整備は一刻を争う問題と思う。平成一三年の水防法の改正により、一級河川などの洪水予報河川については、浸水想定区域の公表が義務付けられ、国や県的全額負担によって洪水時の危険情報が提供されることになったが、ため池については地元負担が原則だ。二次元不足流計算など莫大なシミュレーション費用が

かかる手法より、簡易で安価な手法の開発が、緊急の課題ではないだろうか。

今回の災害で、幸いにも人的被害を出さずにすんだのは、地元の方々、地元消防団の活躍はもとより、国・県の多大な協力があつたからこそと考えている。改めて謝意を表したい。また、今回、中村市長の強力なリーダーシップの下、農地課の職員はじめ市職員も献身的な働きをしてくれた。心から感謝したい。

（平成二〇年九月『農村振興（第七〇五号）』）



紀の川市ため池浸水 ハザードマップ

平成 23 年 2 月、紀の川市全域を対象とした「ため池浸水ハザードマップ」を公表しました。厳密なシミュレーションはしていませんが、ため池災害の危険性を周知するのに大きな効果があると考えています。

※『農村振興』投稿記事は付属CDにもPDFを添付していますので、ご覧下さい（CD資料編②）。

(三) 棚田の起源は紀の川市？

「皆さんは大変な宝物をもっている。しかし、残念ながらそのことにお気づきになっていない。棚田の起源は紀の川市なのです」

平成一九年五月、紀の川市の講演会場を埋め尽くした五〇〇人の聴衆は、中島峰広さんのこの言葉にはっとしました。

中島さんは、早稲田大学名誉教授で、全国の棚田に精通した「棚田博士」といわれている方です。



棚田博士・中島峰広さん

棚田博士・中島峰広さんは、紀の川市が「棚田の起源」であることに初めて着目した方です。私達の「宝物」に気付かせてくれました。

和歌山県下一位の農業生産を誇り、果物が生産の七割を占める紀の川市。「棚田」という言葉は知っていても、紀の川市が「棚田の起源」だったとは、という新鮮な驚きを覚えた人が多かったのではないのでしょうか。

中島さんが、「棚田」という言葉の由来を調べ始めたきっかけは、研究の対象物として「棚田」に取り組み始めた際の素朴な疑問からだったそうです。

そこでたどり着いたのが、応永一三年（一四〇六年）の高野山文書の『僧快全学道衆堅義料田注進状』という文献でした。その中に「棚田」という言葉が現れ、「荒川荘」の東の方にあるとされています。

「堅義」というのは討論会みたいなもので、学道衆という僧侶の一集団の討論会の費用にするための「料田」がこの棚田だったようです。

中島さんは、「荒川荘」という地名を頼りに地

名辞典をひもとき、紀の川市桃山町の元集落を二万五千分の一の地図で探し出しました。行動派の中島さんは、すぐさま地元のエデュケーション委員会に連絡をとり現地を訪ねることにしました。それが平成一〇年のこと。残念ながら、そのときは「ここだ」という特定はできなかったそうです。

中島さんが見当をつけた場所は、丘陵地から沖積地にかけての桃畑です。現地では話を聞くと昭和三〇年代までは水田だったそうです。同時に案内された黒川にある石積みの棚田を見ても、おそらくこの地域一体が日本有数の棚田地域であつたのではないかと考えたそうです。この顛末は、中島さんの名著『日本の棚田』の冒頭で詳しく紹介されています。

その後、東京学芸大学がこの地域の地籍図に小字境を描いた図面を作成したことがブレイクスルー（突破口）となり、早稲田大学の海老沢衷教授の精力的な研究により、高野山文書にある「棚田」の場

所を確定することができました。元集落のはずれにある「オイノ池」の下の水田が、注進状に出てくる日本ではじめて文献上記録された「棚田」であるといふものです。

講演会の前日、私も中島さんと一緒に現地に行きました。しかし、「文献上日本最初の棚田」は、国道のバイパスが最近完成したことによりその下に埋まってしまい、その上のオイノ池も潰れてしまっていました。

バイパス横の直壁の階段を降りたところ、「棚田」の末端にあたるところにわずかながら段々の桃畑が



桃山町元の棚田跡

紀の川市桃山町元地区の棚田跡は、現在桃畑になっていて原形はとどめていません。この貴重な「宝物」を私たちがどう守り活用していくかが課題となっています。

ありました。

桃の袋掛けをされている当地の農家の方にも話を聞くことができましたが、かつて水田だった桃畑がそのように価値のある場所だということは全く知らなかったとのことでした。

私の紀の川市への派遣が決まったとき、中島さんから、

「そこはまさに棚田がはじまったところだ。あんた、よくそこに行ってくれたな」という言葉をいただきました。

中島さんの講演は、紀の川市の「宝物」の存在に、改めて私達が気づききっかけとなったと考えています。

今後、紀の川市の「宝物」である桃山町元の棚田跡について、文化庁や和歌山県立博物館とも連携して、しっかりと調査を進めていきたいと思います。

(平成一九年五月 理事通信)

(四) 棚田のルーツを探る

本日は、シンポジウム『棚田のルーツを探る』にお集まりいただきましてありがとうございます。また、全国からきていただいた棚田学会会員のみなさま、遠いところを紀の川市ようこそおいでくださいました。

昨年五月の棚田博士・中島さんの講演会から一年を経過し、紀の川市にあるという「文献上日本最初の棚田」について、紀の川市と棚田学会と一緒に知見を深めていこうという趣旨で、今回のシンポジウムを企画いたしました。

実は、昨年の中島さんの講演から本日までの間に、紀の川市にとって少々残念なことが判明しました。

「文献上日本最初の棚田」と考えられていた紀の川市桃山町元地区の棚田よりも、七〇年ほど古い文献に「棚田」という言葉が使われていたのです。

場所は、お隣のかつらぎ町の東浜田地区で、史料は、建武五年（一三三八年）の『志富田^{しふたのしよけんちゆう}荘検注帳』です。検注とは、中世、荘園で行われていた土地調査のことです。高野山領であった志富田荘で検注を行った帳簿の中に、「棚田」という言葉が記載されていたのです。このため、「文献上日本最初の棚田」については、かつらぎ町に譲らざるを得なくなりました。

この文献を紹介していただいたのは、和歌山県立博物館学芸員の高木徳郎さん（現・早稲田大学准教授）です。

本日は、基調講演に早稲田大学教授の海老澤衷さんを迎えて『棚田発祥地としての紀の川流域』という講演をいただいた上で、高木さんも交えパネルディスカッションを行い、棚田について議論を深めていきたいと思います。

◆棚田とは？

皆さんは、「棚田」という言葉からどのような田んぼを思い浮かべますか？

紀の川市の近くで有名なのは、有田川町清水の「あらぎ島」の棚田ですね。蛇行する有田川にとりかこまれるように広がる、美しい扇状のこの棚田には、四季折々姿を変えて魅了されます。

中島さんの定義によれば、棚田とは、二〇分の一以上、つまり二〇メートル歩くと一メートル標高が

上がる、そう

いった勾配以上の傾斜地にある水田としています。この定義によれば、全国の水田のおよそ



あらぎ島の棚田（有田川町）

美しい扇形で四季折々の風景を楽しませてくれる「あらぎ島の棚田」。平成 25 年に開催される近畿初の棚田サミットに向けて、高野山との関係などを議論していきたいですね。

八％が棚田と位置づけられます。

棚田には、お米をつくるという基本的な役割以外の様々な機能があります。これを多面的機能といいます。たとえば、洪水防止、水源かん養、良好な景観の形成、保健休養機能など様々な役割があるわけです。

一方、棚田地域は過疎化・高齢化の危機にさらされています。耕作放棄がすみ、のり面崩落など荒廃が進んでいる棚田も多く見られます。

こういった中、棚田の保全を進めていくことが喫緊の課題になっています。

◆棚田保全の潮流

全国の棚田保全の取組が本格的に動き始めたのは、平成七年からです。

この年、「万里の長城にも匹敵する」と司馬遼太郎に賞賛された神在居かんざいこの棚田を有する高知県梺原町ゆすはら

で「棚田サミット」が始まりました。このサミットは、全国の棚田地域の自治体や農家が集まって棚田の役割などを話し合うものです。

長野県千曲市ちくまの姨捨おばすての棚田（第三回）や石川県輪島市しるほねの白米の千枚田（第七回）など全国屈指の棚田地域がこのサミットを招致しています。

そして、平成二五年、和歌山県有田川町で棚田サミットが開催されることが決定しています。これは近畿で初めての棚田サミットとなります。

第一回サミットの二カ月後には、都市住民が主体となつて棚田保全を応援しようという「棚田ネットワーク」が設立されました。平成一一年には、棚田を学問の対象としていこうという「棚田学会」が発足しました。農業土木や地理、文化・歴史学など一級の研究者が集い、学際的な棚田の研究が進められることとなりました。

このように、棚田保全の取組は、「官」主導では

なく、「民」主導で進められてきたことに大きな特徴があります。

このような流れを受けて、国でも、平成一一年に棚田百選を認定し、和歌山県では有田川町の「あらぎ島」の棚田が選定されています。

平成一〇年、国の補助事業として、棚田を整備する制度が創設されました。棚田地域の実情にあわせて等高線に沿った簡易なけいはん整備も可能となるものです。あわせて、棚田における地域活動を支援するための「棚田基金」も創設されました。

平成一二年には、中山間地域等直接支払制度が創設され、棚田地域など条件が不利な農地で農業を営んでおられる方に一定額を支給することができるようになりました。

その後、景観法の制定や文化財保護法の一部改正により、人と自然との関わりの中で作り出されてき

た棚田などの「文化的景観」を守っていく仕組みができました。

また、平成一九年、国民共有の財産である農地・農業用水等の資源を共同で保全する活動などに支援を行う「農地・水・環境保全向上対策」が創設されました。

このように、棚田を保全していく取組は、「民」が引つ張る形で「官」の制度が整えられてきました。紀の川市にも、鞆^{とも}渕^{ぶち}や野田^{のたはら}原を中心に、多くの棚田があります。紀の川市民が、この「棚田」の価値を再認識し、都市住民等も巻き込む中で、棚田を守っていく取組を進めなければなりません。

◆近畿初の棚田サミットに向けて

日本で文献上最初に記されたかつらぎ町東茂田の棚田、紀の川市桃山町元の棚田跡、そして棚田百選にも選ばれた有田川町の「あらぎ島」の棚田、これ

ら和歌山県を代表する棚田はいずれも、高野山領だったところだ。

和歌山県は、紀の川南岸の広い範囲が高野山領でした。和歌山県は徳川御三家の紀州藩のイメージが強く、この「高野山領だった」という事実が忘れがちです。紀の川市でも、鞆^{とも}渕^{ぶち}・名手・荒川荘などが高野山領でした。しかも、名手荘は嘉承^{かしょう}二年（一一〇七年）、荒川荘は平治^{へいじ}元年（一一五九年）、鞆^{とも}渕^{ぶち}荘は元弘^{げんこう}三年（一一三三年）に高野山領になるなど、平安時代や室町時代以来の歴史があるわけです。

このように、高野山は和歌山県の歴史的な棚田地域、棚田発祥の地と非常に縁が深いわけです。

先日、和歌山県の仁坂吉伸知事の講演の中で、高野山から聞いた話として「高野山には現在の貨幣価値で七〇兆円もの価値がある財宝がある」ということを言われていました。保険会社の試算だそうです。

一方、その高野山の資産形成を支えてきたのは、実はこの高野山領、つまり私たちの紀の川市にかつてあった荒川荘をはじめとした棚田地域といえるのではないだろうか。

平成二五年に有田川町で行われる近畿初の棚田サミットに向けて、今後、高野山と棚田との関係をはじめとした「棚田のルーツ」を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。



シンポジウム『棚田のルーツを探る』

シンポジウムでは、紀の川流域の棚田のあり方などについて議論されました。シンポジウムの詳しい内容は、『恵みの源』という冊子をごらんください。

（平成二〇年五月「棚田のルーツを探る」講演を再構成）

※このシンポジウムの内容については、『恵みの源』という小冊子にまとめています。添付CDにもPDFが入っていますので、ぜひ、ご覧ください。

(五)『ふるさとをください』の「ふるさと」とは？

「恐れ入りますが、そのふるさとをほんの少しだけ、分けて貰えんでしょうか。ここにいてる人たちには、帰るふるさとがあらへんのです」

映画『ふるさとをください』の中で、精神障害者の共同作業所「麦の郷」の所長が「紀ノ川屋」の店主に語った言葉です。

精神障害者への差別・偏見は、日本の社会に根強く残っているといわれます。一九六〇年ごろから症状を抑える薬が飛躍的に発達して、再発防止や社会参加が可能になったにもかかわらず、家族が引き取れず病院を退院できない「社会的入院患者」が十万人もいるそうです。こういった引き取り手のいない患者を「ほっとけやん」と地域に施設を作って受け入れようとする「麦の郷」の所長。それに対して、「大事なふるさとに、よそもんが入ってきてひっかきま

わされたらかなわん」と反対する店主。二人の対立する姿は、日本の社会の縮図でもあります。

実は、この映画で描かれる「ふるさと」の主な舞台は紀の川市です。映画の最初のシーンに出てくる百合山から見た美しい「桃源郷」の風景。ヒロインの実家「紀ノ川屋」周辺の歴史風情の深い街並み。髭子^{ひげこ}だんじりを囲んだ粉河の夏祭の情景。エンドロールでも、百合山^{ゆりやま}の山頂にある小さな公園が映し出されます。映画の随所に、私たちになじみのある紀の川市の風景が織り込まれています。

映画の舞台に紀の川市が選ばれたのは、映画監督の富永憲治さんが、粉河の商店街でたまたま入った楠酒店に協力要請したことがきっかけです。粉河寺の大門の近くで通りの向こうに竜門山が迫るロケーションが、監督の「ふるさと」のイメージにぴったりに重なったということでした。

店主の楠富晴さんが、麦の郷理事長の田中秀樹さ

ん（紀の川市^{おちかた}遠方出身）と粉河高校で同級生だったことや、「紀州粉河まちづくり塾」の中心人物だったこともあり、粉河地区を中心とした紀の川市民の協力体制がとんとん拍子にでき上がりました。市役所にも協力要請があり職員がエキストラ出演で協力しました。

この映画は、全国の共同作業所などでつくる「きょうされん」の三〇周年記念として製作され、平成二〇年三月八日の粉河ふるさとセンターでの上映会を皮切りに、全国の自治体で上映活動が展開される予定です。映画の舞台となった紀の川市が注目されるのは、間違いありません。

精神障害は、風土や文化と関係なく、一四〇人に一人の割合で発病するそうです。つまり、誰でもかかり得る病気なのです。脚本を担当したジェームス三木さんは、「精神障害がいかに普遍的なものか、同時に普遍的であるにもかかわらずここに生まれが



写真提供：製作委員会

映画『ふるさとをください』

映画『ふるさとをください』の主な舞台は、紀の川市です。この映画は、障害者福祉とどう向き合っていくか、私達紀の川市民に問いかけているような気がします。

DVD 問い合わせ：イメージ・サテライト 03-3511-7030

ちな差別や偏見の感情をどう考えるべきか、この辺に光を当てたかったです」と述べています（二〇

・インタビュー・



NPO 法人
紀州粉河まちづくり塾
代表
楠 富晴さん

—映画についての想いは?—

映画『ふるさとをください』と出会うまでは、映画づくりについては全然知りませんでした。富永監督が「ふるさと」を探して粉河にたどりつき、もともとの設定を変更してまで当店を舞台にさせていただいたのは、ある種運命的なものと考えています。

「紀州粉河まちづくり塾」のメンバーを中心にこの映画に協力した結果、「人と人とのつながり」を再認識できました。粉河は粉河寺など人をひきつけるマグネットをもっていますが、この映画が「地域づくり」は「人づくり」であると改めて気づかせてくれました。

障害者福祉の問題は、これからの高齢化社会への対応と共通するものがあると思います。映画でベンガルさんが「あんたらも障害者や」と言った言葉が深く心に残っています。

当店では、映画で使った「紀ノ川屋」の看板をそのまま残しています。紀の川市におこしの際は、ぜひ気軽に当店にお立ち寄りください。

映画が「地域づくり」は「人づくり」とある『ふるさとをください』。

れまでの道、これからの夢』（ジエームス三木×藤井克徳）。

この映画は、私たち紀の川市民一人ひとりが、精神障害をはじめとした障害者福祉とどう向き合っ

いくのかを、問いかけているような気がします。

ただ、そういった少し重いテーマを考えなくても、ほのぼのとしたヒューマンドラマとしても楽しめる内容に仕上がっています。ヒロイン役の大路恵美さ

んと「紀ノ川屋」店主で父親役のベンガルさんとの愛情と葛藤。麦の郷の若手職員役をつとめた春口宏彰さんとヒロインとの心温まる交流。笑いあり、涙ありで、心の底から楽しめる映画となっています。特に、春口宏彰さんの真面目で飾らない演技は、出色の出来映えと感じました。

ジェームス三木さんは「これまでに映画で何十本、テレビドラマで何百本という脚本を書いてきました。今までの作品の中で、一番緊張したと言ってもいいと思います」とコメントしています。

さて、冒頭の「麦の郷」の所長と「紀ノ川屋」の店主の葛藤は、どのような結末を迎えるのでしょうか。三月八日の粉河ふるさとセンターの上映会には、ぜひ、みなさんお誘い合わせの上、おいでください。

(平成二〇年三月 理事通信)



「紀ノ川屋」の看板

楠酒店では、映画で使われた「紀ノ川屋」の屋号が今も掲げられています。映画は、台湾、フィリピン、中南米などでも上映され海外からのファンが訪ねてくることもあるそうです。 写真提供：製作委員会

（六）「あら川の桃」の「あらかわ」とは？

本日は、「あら川の桃」の生産農家の皆さんの前で話しする機会をいただき、大変ありがたく感じるとともに少々緊張しています。

この講演では、紀の川市を代表するブランド「あら川の桃」について、その由来などを皆さんと一緒にたどっていきたいと思います。

「あら川の桃」は、その質の高さ、味の良さから

全国的に高い

評価をいただ

いてきました。

このブランド

は、昭和四一

年に紀の川市

桃山町にある

選果場、マン



あら川の桃

「あら川の桃」は、紀の川市を代表する桃のブランドです。その質の高さ、味の良さから全国的に高い評価をいただいています。

写真提供：あら川の桃振興協議会

モス・丸百・第一共選ができて以来使われており、平成六年に商標登録もされています。

この地域の桃は、江戸時代、桃山町段新田地区のむらがきやそはち村垣弥惣八によって摂津国の池田からもたらされたというのが通説になっています。大阪圏では圧倒的なブランド力をもっていますが、近年の販売高の推移を見ると減少傾向にあり、今後、生産力や販売力の一層の強化が課題となっています。

ところで、「あら川の桃」の「あらかわ」とはどういう由来があるのかご存じですか。

紀の川市桃山町には「荒川中学校」と「安楽川小学校」があります。「荒川」と「安楽川」、同じ「あらかわ」という読み方ですが、小学校と中学校で違う漢字が使われているのを何故だろうと思われる方も多いのではないのでしょうか。

「荒川」の由来は古く、古事記と日本書紀いわゆ

る「記紀」までさかのぼります。紀伊の国の荒河戸畔の娘である「遠津年魚眼妙媛」が、第一〇代の崇神天皇に嫁いだ旨の記述が日本書紀にあるのです。同様の記述が古事記にもあります。荒河戸畔とは、この地域を治めていた豪族の長のことをいいます。その娘さんが天皇家に嫁いだということですから、古くからの紀の川市と天皇家の深い結びつきがうかがえます。

さて、遠津年魚眼妙媛は、どんな女性だったのでしょうか。「紀伊国名所図会」によると、「遠津」とは荒川の東、紀の川の南岸にある「麻生津」のことで、音が近いため転訛したものだそうです。麻生津周辺の紀の川では、昔から年魚（鮎）を名産としていたようです。年魚は目の形がとても美しい魚ですので、この周辺を領していた荒河戸畔の娘の眼色の美しさを、年魚の目の形の美しさにたとえたようです。

遠津年魚眼

妙媛は崇神

天皇に嫁いだ

後、「豊城入

彦命」と「豊

鋤入姫命」と

いう2人の子

どもに恵まれ

ました。娘のほうの

言われています。斎宮とは、天照大神を祀った女性

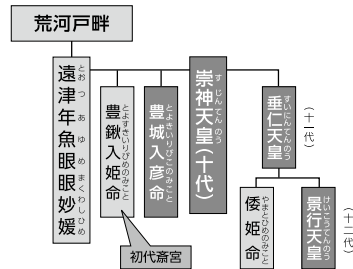
神官のことです。

遠く記紀の時代からあった「荒川」という地名。

その「荒川」から「安楽川」に変わっていったのはどういった経緯があったのでしょうか。

「荒川」は、この地域で古くから氾濫を繰り返し人々の生活に牙をむいてきた「荒ぶる川」に由来す

荒河戸畔と遠津年魚眼妙媛



荒河戸畔の娘、遠津年魚眼妙媛は、第10代崇神天皇に嫁ぎました。古くからの天皇家と紀の川市の深い関係がうかがえます。

ると考えられます。

一方、「安楽川」という地名が使われたのは、平安時代末期、鳥羽上皇の寵妃であつた美福門院得子と深い関係があるといわれます。

美福門院は、鳥羽上皇が亡くなった後、その菩提をとむらうために高野山の壇上伽藍に六角経蔵（荒川経蔵）を建立しました。

そして平治元年（一一五九年）、鳥羽上皇供養の法会の供料として、美福門院は、荒川荘（現在の紀の川市桃山町の一部）を高野山に寄進したのです。

その翌年、美福門院は四四歳で亡くなり、京都の安楽寿院で荼毘に付されます。遺骨を高野山に納めてほしいという遺言どおり、女人禁制の解禁（明治五年）に先立つこと七百年、美福門院の遺骨は高野山の不動院に迎えられました。

「荒川」が「安楽川」と表記されるようになったのは、美福門院が「荒」の字に安楽寿院の「安楽」

の字を充てたことにはじまるという説があります。一方、高野山の学僧が仏教語の「安楽」

びふくもんいんなりこ
美福門院得子の墓と荒川・安楽川



「荒ぶる川」から「祈りの川」へ

「荒ぶる川」（荒川）から、「祈りの川」（安楽川）へ。紀の川市桃山町元の楠の下に美福門院の墓といわれる場所があり、歴史のロマンを感じさせてくれます。

（仏の境地、心の安らぎ、心楽しさ、心身の理想の安らかさをいう）を「安楽川」に充てたという説もあります。いずれにしても、「荒川」から「安楽川」へ、伝説の貴婦人・美福門院とのかかわりの中で、「荒ぶる川」から「祈りの川」に変わってきたといえるでしょう。

遠津年魚眼眼妙媛や、美福門院など、美しい女性の伝承に彩られながら、「あらかわ」という名称が「あ

「あら川の桃」というブランド名で継承されてきたことは、私たちの誇りとするべきものであると同時に、歴史のロマンを感じさせてくれます。



とお
桃りゃんせ夢工房

桃りゃんせ夢工房での桃ジャムづくり体験などは、「あら川の桃」に親しみをもってもらう良い機会になります。
問い合わせ：0736-66-3454

この由緒ある「あら川の桃」の販売額を再び上昇傾向にしていきたいものです。

そのためには、担い手対策や耕作放棄地対策といった生産力の強化だけでなく、桃の販売力の強化を図ることも大切です。平成一九年、農山漁村活性化プロジェクト交付金という補助事業が採択され、竹房の国道バイパス沿いに新しい選果場「西部流通

センター」が誕生する予定です。

糖度センサーなど最新の設備は「あら川の桃」の販売力の強化に資するものと思います。

また、今後、中国等で富裕層が増えて、大きくて美味しい桃の輸出の需要は一気に伸びる可能性があります。関西国際空港から一時間もかからないという紀の川市の利便性の良さは、国内の他の産地と比べて大きな有利性をもっているといえるのではないのでしょうか。

観光客に農業や加工品づくりを体験していただく体験型観光も、大切にしたい分野です。体験を通じて農産物のPRができ



桃源郷と桃山まつり

紀の川市桃山町では、春になると一目十万本、「桃源郷」といわれる美しい桃の花が咲き誇ります。毎年4月に開催される「桃山まつり」にぜひおこしください。

・インタビュー・



あら川の桃
振興協議会
会長
山下忠男さん

—あら川の桃は、なぜ消費者に受けるのだと思いますか？—

あら川の桃は、紀の川の清流、水はけのよい土壌など、気候と風土にめぐまれて出来るものです。しかし、何といても生産者の日々の努力があって「あら川の桃」ブランドがつくられてきました。これからも時代の要請に応じて品質を向上させていくことが大切です。

桃の新たな加工利用にも積極的にチャレンジしていきたいと思います。
羊羹ようかんや酒などに加え、機能性食品の研究も進めていくつもりです。

—山下さんの食育への想いは？—

生産者と消費者が一緒に「食育」を考えていく必要があります。桃の食べ方ひとつとっても、まだまだ美味しい食べ方があるはずです。桃りゃんせ夢工房でのジャムづくり体験などは、生産者と消費者の「食育交流」のきっかけになると考えています。

生産者の日々の努力があって「あら川の桃」ブランドが実現しています。

る効果があります。

桃りゃんせ夢工房で行っている桃ジャムづくりなどの体験プログラムは、「あら川の桃」に親しみをもってもらう良い機会になると思います。

まつりが開催されます。「桃源郷」といわれる美しい桃の花々を見るために多くの観光客が紀の川市を訪れます。紀の川市の「あら川の桃」をアピールする絶好の機会として、観光客をもてなしたいものですね。

毎年四月の桃の季節、紀の川市桃山町では、桃山

(平成二〇年二月二八日 あら川の桃振興協議会講演)

(七) 地方分権の観点からの

華岡青洲先生の偉業とは？

医聖・華岡青洲先生は紀の川市が誇る偉人です。文化元年（一八〇四年）、世界ではじめて全身麻酔による乳がんの摘出手術に成功したことは、あまりにも有名です。作家・有吉佐和子の名作『華岡青洲の妻』でも妻・加恵や母・於継おつぎの献身的な人体実験が紹介され、一般の方々にも広く知られることになりました。

青洲先生は、紀の川市平山地区で生まれ、二三歳から二六歳まで京都で学問を修めた以外は、この平山の地を離れることはありませんでした。当時医学の研究が盛んに行われていたと考えられる江戸、京都、長崎に定住することなく草深い平山の地で全身麻酔による手術に成功し、また、「春林軒しゅりんけん」という

医学校を創設して全国各地の人材を育成したということは、地方分権の観点からも非常に大きな功績と考えられます。

現在でも、地方の優秀な学生は、東大、京大をはじめとする都会の大学に進学しそのまま研究生生活にはいつてしまうことが多いと考えられます。交通の便も発達していない江戸時代に、この地で青洲先生はどうやって世界的な手術に成功し、また、全国レベルでの医学教育に貢献できたのか。その理由を探っていききたいと思います。



地方分権の観点からの 青洲先生の偉業とは？

青洲先生は、何故、草深い平山の地で、「乳がん手術」と「人材育成」という2つの偉業をなしとげることができたのでしょうか。地方分権の観点からその理由を探ります。

華岡青洲（個人蔵）

◆なぜ偉業が達成できたのか

なぜ青洲先生は、草深い平山の地で全身麻酔による乳がん摘出手術という偉業を達成する事ができたのでしょうか？

第一に、中国の医聖・華佗へのあこがれから高い理想を掲げたことにあると考えられます。

青洲先生は、二三歳から二六歳まで、京都に遊学して、吉益南涯と大和見立という二人の医学者に師事しました。吉益南涯は実証主義の古法医学者であり、大和見立は最新式のオランダ医学者でしたので、青洲先生は、京都で和蘭両面から医学を学んだといつていいでしょう。

京都で先生は、中国の医聖・華佗の麻酔手術について学ぶ機会がありました。華佗は、中国の三国時代（二二〇～二八〇年）、今から一七〇〇年以上も前に麻酔薬を調合し切開手術などを重ねた名医です。蜀の名将関羽も華佗の手術を受けたひとりと伝えら

れています。卑弥呼の記載で有名な『魏志』にも、華佗について記述があります。青年時代、華佗へのあこがれを抱いたことが、青洲先生の麻酔薬への研究を決意させたのではないのでしょうか。

第二は、京都遊学中、長門生まれの名医・永富独嘯庵（一七三二～一七六六）の乳がん手術に関する著述と出会ったことです。

永富独嘯庵は、その著書『漫遊雜記』において、次のようなことを書き記しています。

「乳がんは昔から不治の病とされてきたが、オランダの書物に『最初まだ梅の種くらいの時に、よく切れる刀で切りとり、その後は傷を治す方法で治療するとよい』とある。これはよく味わうべき言葉だが、自分はまだ試していない。ともかくも書き記して後世のために残しておく。」

京都遊学中に出会った青年時代の知識が、約二〇年後の世界初の「全身麻酔による乳がん摘出手術」

の成功に結びついていく訳です。

しかしながら、青洲先生は、この成功に至るまでに、家族を巻き込んで大変な苦勞を強いられることになります。

◆青洲先生の使命感

青洲先生が、草深い平山の地で全身麻酔による乳がん摘出手術という偉業を達成できた一番大きな理由、それは、先生が「庶民大衆の病を治す」という使命感を常にもっていたことではないでしょうか。

紀伊徳川家第一〇代藩主・徳川治宝はるとみは、青洲先生の名声を聞き、藩主お抱えの侍医じいになるよう要請しました。しかし、青洲先生はこれに対して、

「私は、元来、庶民大衆の病を治すのを使命と心得ています。公の職に就くとその使命が果たせなくなりますので、どうかご容赦願いたい」と固辞したのです。

後年、藩主の要請を断りきれず条件付きで出仕せざるを得なかったものの、青洲先生の、医師としての使命感だけでなく、庶民大衆に対する深い情愛が感じられるエピソードです。

◆母・於継の言葉

青洲先生の実母・於継は、紀の川市の東隣・かつらぎ町丁之町の出身で、賢婦人として知られています。妻・加恵とともに青洲先生の麻酔薬の実験台に自ら進んでなつたことでも有名です。この母・於継が、青洲先生が平山の地で研究を続ける決意をする上で大きな役割を果たしたことはあまり知られていません

実は、青洲先生が二六歳で平山に帰って父の医業を継いだのち、京都遊学中に抱いた志を達成するために、再び都会に出たいと母・於継に訴えたことがあります。しかし、母はこの願いを断固として許さ

ず次のように青洲先生を諭したそうです。

「人は病気になるものです。もし、その病気を治すことのできる医者がいれば、必ず千里と遠くても診察を請いにくるはずです。なぜ、都会に行つてまで患者を待つ必要があるでしょうか。」

草深い平山の地にいることは問題ではありません。あなたが患者を治す術を完成していないことが問題なのです（『華岡青洲先生及其外科』（呉秀三）P 五三～五四）。」

結局、青洲先生は、母の言葉に従い平山の地を離れることはありませんでした。町医者として病人の診察をするかたわら、ひとり故郷の野山を歩きまわつて薬草を探し、麻酔薬の研究に没頭しました。内外の書物も集め、どん欲に知識を吸収したようです。そして、母・於継と妻・加恵の命もとわぬ協力の下、ついに「通仙散」という麻酔薬を完成させます。この「通仙散」を用いた乳がん摘出手術に世

界ではじめて成功したのは、文化元年（一八〇四年）、青洲先生が四五歳のときでした。

◆平山はたちまち「医学のメッカ」に

全身麻酔による乳がん摘出手術の成功によって、平山の地は全国から患者や医学生が集まる「医学のメッカ」になりました。

青洲先生は、教育者としても優れた才能をもっていました。平山の地に「春林軒」という医学塾を創設し、患者の治療を行うのとあわせて、後進の指導にあたりました。

当時、『華岡流』を唱えなければ患者が寄り付かないといわれるほど、青洲先生の名声は日本の隅々に響き渡っていたそうです。

春林軒で学ぶ者は青洲先生の死後も後を絶ちませんでした。医学生は一、八六一名を数え、出身地も日本全国に及びます。医学塾としていかにしっか

した組織を青洲先生が作り上げたかが分かります。

「平山の地を離れずとも良い医者であれば遠くからでも人はやってくる」と青洲先生を諭した母・於継は、まさに先見の明があったといえるのではないのでしょうか。

◆ため池にこめた青洲先生の想い

「水みたば心をこめて田うへせよ

池の昔を思ひわすれず」

華岡青洲震

青洲の里の北西五〇〇メートルぐらい行ったところの県道ぞいに「垣内池」というため池があります。この地域は、昔から水に苦労したところで、いたるところにため池が造られています。この池は、付近の農民のために青洲先生が造成したもののなのです。

この池がつくられたのは、文化六年（一八〇九年）、青洲先生が五〇歳のころのことです。この付近



かいと
垣内池と青洲先生の歌碑

垣内池のほとりに青洲先生が自ら建てたといわれる歌碑があります。食料自給率が40%となった現在だからこそ、この歌の意味をかみしめてみる必要があります。

の農民は干ばつと税金との二重苦にさいなまれ窮迫のどん底にありました。この状況をみかねて、私財をなげうつて土木工事を起こし、でき上がった池を「垣内池」と命名、そのまま農民共同のものとして与えたそうです。

この池のかんがい面積は約一ヘクタール程度ですが、現在にいたるまで付近の農業用水を確保するために使われています。

紀の川市内には、七八六箇所ものため池がありま

す。市の基幹産業である農業を支えているのも、垣内池をはじめとするため池群だといって過言ではありません。

医学において大きな足跡を残す一方、地域の振興についても、青洲先生が深い思い入れをもっていたことがうかがえます。

写真は、垣内池とそのほとりに残る「歌碑」です。この碑は、先生みずから建てたものといわれ、後世の農家を戒めたものとされています。食料自給率が四〇%となり、日本の農業の在り方を問われている現在だからこそ、この歌の意味をかみしめてみる必要があるかもしれませんね。

◆アストラゼネカ社のCSR活動

平成二〇年一〇月、世界的な製薬会社であるアストラゼネカ社がCSR（企業の社会的責任）活動の

一環として青洲の里をボランティアで清掃していただけになっています。

アストラゼネカ社は、がん治療薬や麻酔薬で世界的なシェアを誇る企業です。CSR活動にも力を入れ、ニューズウィーク誌日本版の世界の企業ランキングでも常にトップクラスに位置しています。日本でも平成一八年から三千人の社員が一斉に高齢化の進む棚田地域で草刈りなどを行うプロジェクトを展開しています。

今回、棚田ネットワーク
の中島峰広代
表の紹介を受けて、青洲の
里の清掃活動
を行っていた
だけること



アストラゼネカ社のCSR活動

アストラゼネカ社のCSR（企業の社会的責任）活動として、平成20年から青洲の里を清掃していただいています。平成22年には加藤益弘社長自ら草刈りに参加しました。

なりました。青洲友の会の皆様にも、清掃活動と一緒に汗を流していただくほか、昼食のおにぎりやおでんの炊き出しにもご協力いただけると聞いています。

全身麻酔による乳がん摘出手術に世界ではじめて成功した青洲先生のお膝元で、世界的な製薬会社のアストラゼネカ社の方々と一緒にボランティア活動ができることは、大変意義のあることだと考えています。

一〇月には、青洲の里を舞台に青洲まつりも開催されます。アストラゼネカ社の方々の協力できれいになった青洲の里に、「よつこそおこしなして」の心で観光客を迎え入れたいものですね。

(平成二〇年八月一九日 青洲友の会講演)

※本文中、母・於継の言葉に関する漢文の解釈について、和歌山県立博物館学芸員の坂本亮太さんに大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。



青洲まつり

青洲まつりは、毎年10月、青洲の里周辺で開催されます。献身的な協力で青洲を支えた妻・加恵の華岡家への嫁入りを模した「青洲時代行列」を、ぜひ見に来てください。



青洲友の会
会長
坂本 康隆さん

皆様お誘いあわせの上青洲の里においでください。

—青洲友の会の活動を教えてください—

青洲友の会は、青洲の里が平成 11 年にオープンしたときから活動しています。郷土の誇りである世界的な青洲先生の偉業をたたえとともに歴史、文化を大切に守り後世に伝えたいという考えから、青洲の里を盛り上げ全国にその名を広めていこうということで、地元の仲間が集まりました。

食と健康をテーマに、1 月の七草粥がゆまつりや 10 月の青洲まつりなど、青洲の里では様々なイベントがあります。健康バイキングもとても美味しいので、ぜひ、皆様お誘いあわせの上青洲の里においでください。

アストラゼネカ社の CSR 活動も平成 20 年から毎年青洲の里で受け入れています。都会の若い人たちと草刈り奉仕などで汗を流しています。若い人と作業することによって元気が出ます。医療の原点である青洲の里で世界的な製薬会社が奉仕活動をしていただくのは、大きな意味があると考えています。

(八) EUの農村振興施策リーダープラス

◆はじめに

日本の農村では、少子高齢化・過疎化等により活気が失われ、都市部との格差が開きつつあります。

このため、様々な農村振興施策が講じられてきていますが、棚田オーナー制度など「民」主導で行われてきた事例が見られる一方、従来の施策が「官」主導で進められてきた面があることは否めません。

ヨーロッパの農村においても、我が国と同様、過疎化や都市部との地域格差の問題に直面し、農業後継者を含む若者や女性の農村離れを食い止めるのに苦心しています。

こういった事情を背景として、農村住民が主体となって実施するボトムアップ型のリーダープラス事業（以下、「リーダープラス」という）が、EUの助成で実施されています。

私は、平成一七年、ドイツ連邦共和国南西部のバーデンビュルデンブルク州（以下、「BW州」という）で実施されているリーダープラス南黒い森地区を調査する機会を得ました。

本稿では、リーダープラスの概略を述べた上で、南黒い森地区の実施状況とその課題、展望等について述べます。

◆リーダープラスとは？

リーダーとは、フランス語の「農村経済発展の活動の連携」という意味の言葉の略語です。

リーダープラスは、リーダー・Ⅱと二期にわたる前身事業を経て、平成一二年（二〇〇〇年）から平成一八年（二〇〇六年）までの七カ年のEUの助成事業として実施されています。

リーダー事業は、農村住民が主体となって実施する農村活性化事業として位置づけられますが、この

第三世代の事業は、内容を補強しつつそれまでの地域的限定をはずしてEU全域への展開を図ることとしたので、単なる延長のⅢとせず、質的な区切りとして「プラス」をつけて「リーダープラス」とされました。

◆リーダープラス南黒い森地区

平成一七年一〇月、私はBW州ヴァルツフト郡事務所内の南黒い森地区事務局を訪れ、関係者へのヒアリングと、実施中の四プロジェクトの視察を行う機会を得ました。以下は、地区の概要です。

○対象地域 面積一、四二七km²（五郡四二市町村）、人口約一〇万人

○事業の目的 「生活、仕事、休暇」という三つのタイプの目的の下、地区全体の経済発展を推進

○事業内容 投資プロジェクト一〇地区および調査プロジェクト八地区

○助成措置

二〇〇二年から五カ年間で約四〇〇万ユーロを投資、EUが半額を助成

◆現地調査四プロジェクトの概要

現地調査を行った四プロジェクトの投資額と事業概要は以下の通りです。

プロジェクト名	投資額	事業概要
白いモミの木ホール	44万ユーロ	地元産のモミの木で馬の展示会用ホールを造成
スキー博物館拡張	56万7千ユーロ	地元出身のスキーヤーを記念した博物館を拡張
縄づくり工房	20万8千ユーロ	伝統的な縄づくりを体験できる工房を造成
アチェ博物館	28万ユーロ	昔ながらの農家・民宿を博物館として再現

◆分析

南黒い森地区でリーダープラスに取り組んだ背景は、このままでは人口が衰退し過疎になってしまうという危機感にあります。EUの助成事業であるリーダープラスを導入することで、本地区の活性化が期待されています。

リーダープラスは、①パートナーシップ、②地域立脚型、③実験的、④ボトムアップ、⑤地域間・越国境的協力という特徴をもっています。

リーダープラスの事業主体は、行政機関、NGO・NPO等の市民団体、地域住民などから構成される地域活動グループ(LAG)です。LAGのメンバーは五〇%以上民間人でなければならず、この事業の「民」主導を明確化しています。本地区でも、事業の推進母体として二七人でLAGが組織されています。

LAGは、①実施主体としての役割と、②個別案

件に係る審査機関としての役割という二つの性格を有しています。たとえばスキー博物館の拡張工事の申請に当たって、LAGのメンバーでもあるエッカー村長自身が、LAGでプレゼンテーションを行ったそうです。

また、従来、行政サイドからリスクが高いと敬遠されていたようなプロジェクトを積極的に支援する「実験的」という要件により潜在的な地元事業や斬新なアイデアを発掘することができます。本地区においても、

白いモミの木ホールで「実験的」に二〇〇年
前の様式を
現代によみ
がえらせま



ブライナウ「縄づくり工房」
キーワードは「民」主導

EUの農村振興施策リーダープラスのキーワードは、「民」主導。ブライナウの「縄づくり工房」では「越国境的協力」として、フランスの事業地区と交流しています。

した。

縄づくり工房では、フランスの事業地区と技術者の交流を通じて「越国境的協力」を行っています。

いずれにしても、リーダープラスの特徴をうまく活用しながら、ボトムアップ的に農村活性化に取り組んでいる状況が把握できました。

◆終わりに

リーダープラスの次期事業として、従来のリーダー事業の特徴を活かしながら、リーダー事業をEUの農村振興施策の主流（メインストリーム）として位置づけ、「農村振興のためのヨーロッパ農業基金」（EAFRD）により、平成一九年（二〇〇七年）から平成二五年（二〇一三年）まで助成が行われることになりました。

折りしも、日本では、平成一九年度から「農地・水・環境保全向上対策」がスタートし、紀の川市で

も三九地区で実施されています。この対策において、地域の協議会が主体となって事業運営を行うという「民」主導型が採用されたのは画期的なことと考えられます。

リーダープラスの考え方を日本にそのまま導入することはできません。しかし、過疎化・少子高齢化の進む農村の活性化は、日・欧共通の悩みです。リーダープラスの取組は、今後の日本の農村振興を考える上で、大いに参考になるのではないのでしょうか。

（平成一九年一月八日 農業農村工学会京都支部発表会）

※詳細については、付属CDに添付している投稿記事『EUの農村振興施策LEADER+（リーダー・プラス）事業について』のPDFをご覧ください（CD資料編③）。

(九) 日本とドイツの農業環境政策

本日は、日頃から有機農業に取り組んでおられる皆さんの前でお話しする機会をいただき、大変恐縮し、かつありがたく思います。

私は、現在紀の川市役所に勤めていますが、以前、農林水産省農村振興局で自然再生関連施策などに携わっていました。その際、「ドイツでは環境支払い制度というものがあり、農場にいる虫の数を基準に農家に政府からお金が支払われている」という話を環境団体の方からよくお聞きしました。

その後、国土交通省に出向し、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州（NRW州）の農業環境政策を調査する機会に恵まれました。

本日は、その成果に基づき、環境保全型農業に関する日本とドイツの施策の比較を通じて、環境と農業の関係について皆さんと一緒に考えていきたいと

思います。

◆日本とドイツの農業政策

日本とドイツの農業政策を考える場合、まず基本的な条件の違いを頭に入れておく必要があります。両国の総面積はさほど違いがないのに、ドイツの農地面積は国土の約半分あり農家一戸当たりの経営面積も広大です。カロリーベースの食料自給率も高く、日本と比べて条件に恵まれています。

また、EUの共通農業政策（CAP）によって、価格所得政策等によりドイツをはじめEU域内の農業が保護されてきました。

ただ、この農業保護策が農産物の生産過剰を引き起こし、その対応に苦しんできました。このため、EUでは、CAP予算の改革を進め、大きな流れとして、第一の柱（介入買い入れや輸出補助金などの価格・所得政策）から、第二の柱（条件不利地対策

や農業環境政策などの農村振興政策）に予算をシフトさせてきています。

農家への直接支払いには①条件不利地対策、②農業環境政策、③生産調整を前提とした直接支払いの3つのパターンがあります。すでに、EUでは昭和五〇年（一九七五年）に条件不利地対策、昭和六〇年（一九八五年）に農業環境政策を導入し、平成四年（一九九二年）からは順次、市場での価格支持を削減して直接支払いを導入しています。

一方、日本の農業政策は、平成一年（一九九九年）の食料・農業・農村基本法の制定を受けて、平成二年度（二〇〇〇年度）に条件不利地対策である「中山間地域等直接支払制度」がはじまっています。平成一九年度（二〇〇七年度）からは、農水・環境保全向上対策と品目横断的経営安定対策がはじまっています。

◆ドイツNRW州の農業環境政策

NRW州は、州都デュッセルドルフ、人口一、八〇〇万人のドイツ最大の州です。なお、ドイツでは州の権限が強く州がEUと直接交渉して農業政策を立案しています。

NRW州を調査しようと考えた理由は、二つあります。

一つ目は、従来ドイツ南部の財政力豊かな州の制度が日本で紹介されることが多かったのですが、石炭産業を主としたルール工業地帯を抱えて財政力が必ずしも豊かでないNRW州の農業環境政策を、財政の厳しい日本に紹介する価値が高いと考えたのです。

二つ目は、当時私が在籍していた国土交通省出身の書記官がデュッセルドルフにいたことです。彼を通じて州政府にアプローチし、州政府の担当官へのヒアリングだけでなく現地調査までお願いすること

ができました。

事前にホームページなどで情報収集をしていたこともあり、大変大きな収穫を得ることができました。

NRW州の農業環境政策は、通称KULAPと呼ばれています。環境に配慮した農業を行う農家に経済的な支援を行う制度です。

平成五年（一九九三年）からスタートしたこの施策は、平成一六年（二〇〇四年）には州農地の二〇％に当たる二九万ヘクタールで実施され、予算も五三二〇万ユーロ（ユーロ一四〇円換算で約七五億円）まで伸びています。

KULAPには、「農業環境施策」と「契約自然保護」の2つがあります。

「農業環境施策」は、普通の農地を対象とした制度です。例えば、草地一ヘクタール当たり成牛一・四頭以下に制限するなど草地の粗放化を図ったり、

有機農業を奨励したりするものです。予算的にはKULAPの八割を占めます。

「契約自然保護」は、自然保護が必要な特別な農地を対象とした制度です。例えば、農地に生息する鳥類の生態にあわせて草刈りの時期を調整します。そんな難しい営農をするよりは、いつそのこと農業をやめてしまったほうが自然保護上有利な気もしますが、農業が継続されているからこそ生息できる

生物もいるとい

うことなのです。

予算的にはKULAPの二割を占めます。

KULAPについての評価を州政府に尋ねたところ、植生も



NRW 州の農業環境政策 KULAP

KULAPには、普通の農地を対象とした「農業環境施策」と自然保護が必要な特別な農地を対象とした「契約自然保護」の2種類があります。

よくなり観光面でも希少な動植物を観察できるようになったことから、州民からも高い評価を得ているとのことでした。特に、中山間地で粗放化している草地は、州民の目に触れる機会が多く、良い評価を得ているそうです。

◆日本の制度検討に向けて

和歌山県で有機農業に取り組んでおられる皆さんにとつては、こういったドイツの事例を参考にした日本型の農業環境施策を待ち望んでおられると思います。

ただ、ドイツと日本の農業をとりまく状況の違いは改めて認識しておいていただきたく思います。

一つ目は、ドイツは広大な農地を抱えていて食料自給率も大変高いことです。日本は食料自給率が四〇％と低いため、農地の粗放化や生態系保全によって生産性を低下させる制度設計は困難がともな

います。

二つ目は、ドイツ国民の自然保護や環境保全型農業に対する意識の高さです。農地に生息する貴重な動植物を守ってこういう強い姿勢には敬服するものがあります。日本では自然保護や環境保全型農業に対する国民の理解は一定のレベルにとどまっているのが現状ではないでしょうか。

日本でも、平成一七年（二〇〇五年）に策定された新たな食料・農業・農村基本計画において、我が国の農業について環境保全を重視したものに転換することを推進するとされ、平成一九年（二〇〇七年）に有機農業の推進に関する法律が制定されるなど、環境保全型農業に対する追い風が吹き始めています。

日本の九割以上の消費者が「環境に配慮した農産物」について、一定の条件がそろえば購入したいとする調査結果もあります（有機農業をはじめとする

環境保全型農業に関する意識・意向調査、平成一九年）。

平成二二年（二〇〇〇年）にはじまった中山間地域等直接支払制度は、棚田サミットや棚田ネットワークなど「民」発の地道な活動が制度創設に結びつきました。

今後、日本において、本格的な農業環境政策をスタートさせるためには、皆さんのように有機農業を実践する農家の方々と、環境に配慮した農産物を評価する消費者との相互の理解・連携が不可欠なのだと思います。

本日のドイツNRW州の農業環境政策についての講演が、その一助になれば幸いです。

（平成二〇年二月二八日 和歌山県有機認証協会講演）

※詳細については、付属CDに添付している投稿記

事『ドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州の農業環境政策KULAPについて』のPDFをご覧ください（CD資料編④）。

また、③、④の学会誌記事以上に詳しいことを知りたい方は、『ドイツ連邦共和国農業環境政策等レポート』（平成一八年）のPDFをご覧ください（CD資料編⑤）。

(十) ほ場整備のススキ

紀の川市は、県下第一の農業生産額を誇ります。

特に果物については、全国一位のはっさく・いちじく、二位の桃、三位の柿をはじめ全国有数の生産額です。

ただ、紀の川市の農業産出額を一〇年前と比べてみると、二二三億円（平成七年）から一六一億円（平成一七年）と、七二億円も減っています。これは、農産物価格が下がるなどの外的要因と、農家の高齢化が進み耕作放棄地が増えるなどの内的要因があります。

ここで問題になるのは、紀の川市のは場整備が進んでいないことです。ほ場が小さく、農道がせまく水路も引かれていない状況では、農地を人に貸すこともままなりません。

ほ場整備は、農道や水路、区画整理などの整備を

総合的に行うもので、農業の生産性だけでなく生活環境の向上にも貢献します。

紀の川市では、中村愼司市長のお膝元である貴志川町の各地区をはじめほ場整備の先進事例があります。

中でも、貴志川町西山地区では、ほ場整備を行った結果、後継者が何人も帰ってきたそうです。ある後継者はコンピュータ関係の仕事に従事していたのですが、今は、ほ場整備をした農地でキュウリづくりに取り組んでいます。「ほ場整備がなければ、農業に携わらなかった」と言われています。

和歌山県の水田のは場整備率は、三六%と全国平均の六一・三%と比べて極端に低い状況です（農林水産省・農地の整備状況（平成二〇年））。私が昔住んでいた新潟県では、三〇アール区画の整備は昭和四〇年代に終わり、すでに一ヘクタール区画の整備を進めている状況でした。一方、紀の川市では

三〇アール区画の整備も終わっていないところが大半です。

中村市長も、常々貴志川町など紀の川の河南で進められてきたほ場整備を、旧打田町など河北で進めていく必要があると言われています。

ほ場整備は、個人の財産である農地を扱うため、関係者の同意を得ることは大変な作業となります。しかし、水路や農道の不具合や農地の集団化、耕作放棄地の増加などの問題が、ほ場整備を行うことで一気に解決します。



ほ場整備でかわらなきゃ！ 農業・農村！

和歌山県の水田のほ場整備率は全国と比べて極端に低い水準です。紀の川市の農業の将来を考えたとき、ほ場整備の推進は必要不可欠です。

紀の川市では、『ほ場整備でかわらなきゃ！農業・農村！』というパンフレットを作成して、旧打田町地区を中心に説明会を開催し、ほ場整備の啓発普及につとめています。

説明会に参加した農家からは、「高齢化して後継者もいないので難しい」、「負担金を出してまで整備したくない」など後ろ向きの声も聞かれますが、辛抱強く推進する中で、地区を引っ張ってくれる農家がでてくることを期待しています。

また、市担い手育成総合支援協議会にはほ場整備推進部会を設置しました。ほ場整備の実施済みの地区とこれからほ場整備をやってみようという地区の役員さんに情報交換をしてもらい、ほ場整備の機運を高めています。

紀の川市の農業の将来は、ほ場整備の推進にかかっているといっても過言ではありません。

・インタビュー・



紀の川市
農業委員会
会長
西川 泰弘さん

ほ場整備は地域コミュニティ再生の手段にもなります。

—ほ場整備を進めるメリットを教えてください—

私の住んでいる西山地区では、ほ場整備に取り組んだ結果、後継者が何人も帰ってきました。

ほ場整備は地域コミュニティ再生の手段にもなります。様々な利害調整を通して地域がまとまり、事業が完成した後、地域住民の「和」ができます。

—西川さんの食育への想いを教えてください—

食育とは、次世代に「食」を通じて愛情を伝えていく行為だと思います。例えば^{そう}に雑煮ひとつとっても、家庭や地域ごとに味が違ってきますよね。

紀の川市で食育を進めることで、地域や家庭で、子から孫へ「愛情」を伝え継続してほしいものです。

ぜひ、農業委員会みなさまにおかれましても、市の農業振興を図る観点から、地元では場整備を推進していただくよう、よろしくお願いいたします。
(平成三十二年八月一〇日紀の川市農業委員会講演)

※『ほ場整備でかわらなきや！農業・農村！』は、付属CDのPDFをご覧ください(CDコンテンツ編⑨)。

(十一) 紀の川市の森林の価値とは？

本日は、那賀広域森林組合の皆さんにお話しする機会をいただき、大変ありがとうございます。

紀の川市に赴任してから、龍門山や和泉葛城山、ハイランドパーク粉河、細野、鞆^{ともふち}など紀の川市の山林を何度となく歩きました。そのたびに、紀の川市のふところの深さといってもいいでしょうか、「こんなに素晴らしいところが紀の川市にあったのか」という感慨をもちます。

地球温暖化問題が顕在化する中で、森林のもつ価値が世界的に見直されつつあります。紀の川市の森林は、市の面積の半分、約一万ヘクタールありますので、この森林の価値をどうとらえていくのかは、紀の川市自体の価値を見直すことにもつながります。本日は、紀の川市の森林のもつ価値について皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

◆紀の川市の森林の現状

紀の川市の森林の人工林率は約五〇%、スギ、ヒノキが大半を占めます。九〇―一〇齡級（四五―五〇年生）の伐採の適期にきている林分（森林を管理するまとまった区画）も多いのですが、最近の木材価格の低迷や林業労働力の高齢化などを背景に、間伐などが行われず荒れている森林が増えているのが現状です。和歌山県のスギ^{やま}元立木^{もとたち}価格（立木の状態での一m当たりの樹木の販売価格）が昭和五〇年の二二、九一七円から平成二〇年の二、七〇二円と三五年前の約一割にまで落ち込んでしまったことから考えれば仕方がないかもしれません。

しかし、森林は薪などの燃料や材木の供給源としてだけでなく、国土の保全や水源のかん養等のほか二酸化炭素の吸収源としての役割も果たしていますので、その適正な管理が必要です。

◆紀の川市の森林の価値とは？

ところで、紀の川市の森林の価値を試算してみるとどれぐらいの金額になると思われますか？

和歌山県の森林の公益的機能の評価額は、一兆〇三五九億円／年と試算されています（県林業振興課、平成一九年）。水源かん養機能や土砂流出防止機能などの機能の評価額を単純に合計した値です。県全体の森林面積のうち紀の川市の森林が占める割合は約三％です。紀の川市の森林の評価額は三一〇億円／年という試算結果となります。

紀の川市の農



市内中学生の間伐体験

紀の川市の森林の評価額は310億円／年という試算額で、紀の川市の農業生産高161億円（平成17年）の倍の数値となります。

業生産高が年間一六一億円ですから、その倍の価値が森林の公益的機能にはあるということですね。

ただ、間伐などがされていない森林が増えていく紀の川市の現状から見れば、このまま放置すれば、その価値も大きく下がってしまうと考えるべきでしょう。

◆森林の価値の再生に向けての提案

それでは、紀の川市の森林の価値を再生していくためには、どのような取組を進めていくべきなのでしょう。

私なりに提案をさせていただきます。

第一に、紀の川市の森林の公益性を発揮するための取組を進めていくことです。

幸い、平成一九年度から「紀の国森づくり基金活用事業」がはじまりました。県民から一人五百円、

法人から法人税均等割額の5%をいただき県内の森林づくりに充てる事業です。紀の川市でも、この事業をハイキングコースの整備や小中学生の間伐体験活動に活用しています。

また、たとえば、スギやヒノキなど針葉樹の同じ年齢で構成される単層林から、広葉樹と針葉樹が混交する針広混交林、異なる年齢の木で構成される複層林に誘導することによって、より市民に親しみやすい多様な森林を造成することが必要です。

第二に、間伐などを繰り返しながら大径木を生産する長伐期施業への移行です。たとえばスギの場合、伐採の時期を大径材となる八〇年生とします。

木材価格の低迷で、皆伐方式（一定の範囲の樹木を一時に全部伐採する方式）で木材を搬出しても、植栽に係る経費を考えれば赤字になるばかりです。コスト意識をもって、作業道開設と高性能な林業機



低コスト林業の推進

これからの林業経営は、100年先を見通し、作業道開設と高性能な林業機械を組み合わせた低コスト林業に取り組む必要があります。

械を組み合わせた間伐材などの生産に取り組むことが必要です。一〇〇年先を見通した森林づくりが求められています。

第三に、紀の川市産木材を紀の川市で活用する木材版「地産地消」の推進です。

平成二一年の日本の木材自給率は二七・八%と、食料自給率四〇%と比べても低迷しています。木材自給率を向上させていくためには、まずは紀の川市産の木材を紀の川市で活用することからはじめるべきではないでしょうか。

・インタビュー・



那賀広域森林組合
組合長
森田 邦久さん

—紀の川市の森林再生のためには何をすべきですか？—

私は昔から山仕事をするのが好きで、よく下草刈りや枝打ちなどをしています。木が育っていくのが何よりの楽しみです。

那賀広域森林組合は、平成 14 年、紀の川市域の 4 つの森林組合が合併して誕生しました。紀の川市の森林は市の面積の半分を占めますが、長期の木材価格の低迷を背景に荒れている森林が多いのが現状です。山が荒れると、木材としての価値は下がるし災害にも弱くなるし良いことはありません。何よりこのままではご先祖様に申し訳ない。

山は「水」の源でもあるし、山主さんには間伐など山の手入れをもっとお願いしたいと思います。地球温暖化対策で行政の支援も充実してきていますので。

山主さんには山の手入れをもっとお願いしたい。

紀の川市で搬出された間伐材は、現在京都の舞鶴の合板会社に持ち込んでいますが、今後、これを市内の道路事業のガードレールや防護柵、バイオマスエネルギーなどに幅広く活用するための検討が必要です。

せっかく身近な山林に活用可能な間伐材があるので、みなで知恵をだしあい工夫していく努力が必要です。

◆第六二回全国植樹祭に向けて

森林は、現代に生きる私たちだけのものではなく、後世に伝えるべき「緑の社会資本」です。森林の価値をきちんと評価するとともに、林業を「食べていける」よう再生させていくことが重要です。那賀広域森林組合の皆さんには、市内に一四ある財産区と連携して、紀の川市の森林・林業の再生を進めていただきたいと思います。

折りしも、今年五月、昭和五二年に続いて和歌山県で二回目の全国植樹祭が田辺市で開催されます。

この植樹祭に向けて、県内で森林・緑の啓発普及活動が展開されています。紀の川市でも、この機会に市の面積の半分を占める森林の価値を見直していきたいものですね。

（平成二三年一月 那賀広域森林組合事務局講演）

(十二) 紀の川市の「光」とは？

— 紀の川市の観光を考える —

市の観光行政を管轄する立場として、日頃より、紀の川市観光協会の皆様には大変お世話になっていきます。

本日は日頃より私が考えていることをざつくばらんにお話ししたいと思います。

◆ 紀の川市の「光」とは？

「観光」という言葉は、古代中国『易経』の「国の光を觀る。用て王に實たるに利し。」という句に由来します。観光とは「国の光」を觀ることであって、そういった光り輝く国から素晴らしいもてなしを受けた人々の力によって、その国はますます繁栄することになるという意味です。

それでは紀の川市の「光」とは何なのでしょう。

私は、紀の川市の「光」は、紀の川市の文化、自然、農産物などの地域資源であり、それを支える紀の川市民のおもてなしの心なのだと思います。

紀の川市には、粉河寺の絵巻と鞍瀨の神輿という二つの国宝をはじめとした文化財、母なる紀の川や龍門山などの自然、日本一の農産物直売所・めつけもん広場や県下第一位の生産高を誇る農産物があります。貴志駅の「たま」駅長のよちに、新たに全国区となった観光資源もあります。

そういった「光」を生み出す源は、紀の川市民の笑顔、おもてなしの心です。

「観光」は、紀の川市民の誇りにもつながっているものです。紀の川市民が一体となって観光振興に取り組むことによって、誇りのもてるまちづくりができると思っています。

◆紀の川市の観光の強み・弱み

紀の川市の平成二十二年の観光客数は二三〇万人で、市町村単位では和歌山市、田辺市、白浜町について県下四位です。意外と多いという印象を持たれたのではないかと思います。この中でも、めっけもん広場への観光客が約八〇万人で日本一のファーマーズマーケットの存在感を感じさせてくれます。

ここで、紀の川市の観光の強みと弱みを考えてみたいと思います。

紀の川市の観光の強みは、文化、自然、農産物などの豊富な地域資源があることと、関西国際空港から一時間圏内と都心からの利便性の良さなどがあげられます。

一方、紀の川市の観光の弱みは道路整備が遅れ交通アクセスが悪いこと、宿泊施設が少なく滞在型の観光客が少ないこと、そして、紀の川市としての統一的なブランドが定着しておらず情報発信力が弱い

ことなどがあげられます。

◆観光振興に向けての提案

それでは、紀の川市の観光振興に向けて、どのような取組を進めていけばよいのでしょうか。三つほど提案させていただきます。

第一が、紀の川市の観光施設のネットワーク化です。めっけもん広場や貴志駅の「たま」駅長のところに来ていただいた観光客を、粉河寺や青洲の里にも来ていただく仕掛けができればいいですね。紀の川市の観光施設のネットワーク化を考えていくことが必要です。

第二が、農家民泊など滞在型観光の推進です。

紀の川市の平成二十二年の宿泊客は一万人を割っていて、観光客の数に比べて宿泊客が極端に少ない状

況です。紀の川市をゆつくり味わってもらうためには、滞在型の観光客を増やしていかなければなりません。

そのひとつの手法として、農家の空きスペースを有効活用した農家民泊は、今後人気を呼ぶ可能性大です。私も、ドイツで農家民宿に泊まったことがあります。紀の川市に「癒し」を求めてくる潜在的な観光客は多いと思います。

第三が、「食育のまち紀の川市」のブランドの構築です。

紀の川市は、平成三二年二月、「食育のまち」宣言を行いました。

宣言文の中でも、「食育」を観光振興に結びつけていく趣旨がうたわれています。農業体験とあわせて、地場農産物の食育メニューなどもふるまい、紀

の川市の「食」の素晴らしさを堪能してもらいたいものです。

◆むすびに

紀の川市では、平成二〇年度、『たび旅散策マップ』というパンフレットを作成しました。紀の川市内の観光施設をめぐる散策コースを提案するとともに、紀の川市の用水路、ため池などを紹介しています。紀の川市には、たくさんの豊富な地域資源があります。観光客だけでなく紀の川市民にも、このパ



たび旅散策マップ

『たび旅散策マップ』を片手に、観光客だけでなく紀の川市民にも、ゆつくりと紀の川市の「光」を味わっていただきたいものです。

ンフレットを片手にゆつくりと紀の川市の「光」を味わっていたです。

先日、和歌



たまミュージアム貴志駅

「たまミュージアム貴志駅」では、地場産フルーツを使ったフレッシュジュースを提供する「たまカフェ」が大人気。和歌山電鐵と市行政との連携プレーの「たま」ものです。

山電鐵株式会社との磯野省吾専務とお話する機会がありました。和歌山電鐵では、貴志駅の「たま」駅長が全国的な人気者になっています。これも、市民の熱意と行政の支援があったからこそ「たま」関連の取組がうまくいっているという褒めの言葉をいただきました。全国でも、これだけ市民と行政を巻き込んだ支援を得られる地域は珍しいとのこと。平成二二年八月にオープンした貴志駅「たまカフェ」では、市商工観光課を通じて、地場産果物の

フレッシュジュースを提供できる体制が整いました。貴志駅前のレンタサイクル「いちご自転車」や貴志川観光いちご狩り協会の「いちご狩り」も行政との連携により取り組まれています。

これからも、市民・行政・和歌山電鐵が一体となつて、貴志川線の活性化に取り組んでいかなければと考えます。

紀の川市の「光」をつくっていくのは、紀の川市

民一人ひと

りの「ようこそおこしなして」という気持ちではないか
と思います。
今年は、
折りしもほ



2011 ほたるサミット in きのかわ

「2011 ほたるサミット in きのかわ」のテーマは「ほたる灯に 集う仲間と まちづくり」です。「ようこそおこしなして」の気持ちで全国の市町をお迎えしたいものですね。

瀬川のホタル 写真提供：和歌山新報

・インタビュー・



紀の川市
観光協会
会長
岩崎健男さん

ー紀の川市の観光についてー

紀の川市観光協会では、「紀の川
ぶるぶる娘」というフルーツキャラ
クターをつくったり、『おもしろい
な、紀の川市』というホームページ
を立ち上げたり、紀の川市の良さの
PRにつとめています。「紀の川ぶる
ぶる娘」については、Tシャツなど
キャラクターグッズも販売していま
す。こういったキャラクターは、ま
ちの個性を売り出していくのには大
切ですね。

ー岩崎さんの食育についての想い は？ー

紀の川流域の米は、大台ヶ原を源
とする紀の川の清流に育まれてでき
たものです。この米をつかった紀州
の茶がゆを南高梅の梅干しで食べる
と美味しいですよ。紀の川市の風土
にあった伝統食を大切にしていきたい
と思います。

紀の川市の風土にあった伝統食を大切にしたいですね。

たるサミットが紀の川市で開催される年です。テー
マは「ほたる灯^びに 集う仲間と まちづくり」で、
六月九、十日の二日間、ほたるを通じて自然保全に
取り組む全国の市町が紀の川市に集まります。おも
てなしの気持ちでお迎えしたいものですね。

今後とも、紀の川市観光協会の皆さんの力添えを

得て、紀の川市の「光」がますます輝くことを祈念
しています。

(平成三十三年二月 紀の川市観光協会事務局講演)
※『たび旅散策マップ』は、付属CDのPDFをこ
覧ください(CDコンテンツ編⁽¹⁰⁾)

(十三) 紀の川市商工会に期待すること

本日は紀の川市商工会の皆様の前でお話しする機会をいただき、大変名誉なことと考えています。

また、平成二十一年七月の紀の川市商工会の発足に当たっては大変なご努力をいただきましたこと、改めて敬意を表したいと思います。

実は、私のルーツは商人です。祖父の代に、神奈川県平塚市で紙や文房具を扱うお店を創業し、現在、私のいとこが店を継いでいます。平塚に七夕まつりというおまつりがありますが、その創設にも祖父が深くかかわったそうです。

ただ、神奈川県の中核市とはいえ、本市と同様、商工業者のおかれている現在の状況は厳しいようです。

父は四男坊だったものですから大阪の会社に就職してサラリーマンをしていましたが、よく父から商

売人の大変さなどを聞かされていました。

こういった中、私が紀の川市の担当部長として商工行政に関わる立場になったのは、ある意味運命的なことだと考えています。

本日は、市内の商工会や商工業者の方々とおつきあいさせていただく中で、日々感じていることなどをお話しできればと思います。

◆紀の川市行政と商工会の連携

紀の川市では、新市発足以来、商工会と連携して商工業の振興を図ってまいりました。

毎年、市で助成して商工会にプレミアム商品券を発行していただき市内の商店街での買い物を促進しています。小規模事業者への利子補給も市が助成しています。その他、国・県の補助事業も商工会と連携して対応しています。

平成二〇年に総務省の補助を受けた「粉河とんま

か通りモニユ

メント事業」

や平成二二年

度からはじま

ることになっ

た「わがまち

元気プロジェクト」も、市と商工会が連携して、国・県の助成を

受けた取組といえるでしょう。

「ご存じの通り、商工会には、商工業の総合的な発展を図る「経済団体」としての性格と、地区内の小規模業者等の経営改善普及事業を実施する「指導団体」としての性格があります。

私が最近つくづく思うことは、市内の小規模業者へのきめの細かい対応について商工会の「指導団体」としての役割が極めて大きいということです。

市行政では、個人商店の経営状況を把握して専門



紀の川市プレミアム商品券

商工会では、市と連携して紀の川市プレミアム商品券を発行しています。地元のお店街の活性化に大きな効果をあげています。

的なアドバイスを行うことは、難しい部分があります。きめ細かい対応ができる商工会の存在があつてこそ、市内の商工業の振興ができるのではないのでしょうか。

◆商工業の発展のために

紀の川市内の商店街は売り上げが減少しているところが多く、閉店する店が増えています。この原因は、景気の低迷や公共工事の減少、規制緩和などの外的要因が大きいと考えられます。商店街に店を構えていれば一定の収益を確保できた時代から、何らかの「工夫」がないと生き残ることさえできなくなり、小規模事業者ほど後継者もなく店じまいしてしまつという状況になっています。

これは、紀の川市だけで起きている現象ではなく、例えば、東京の早稲田の商店街などでも厳しい状況があるようです。

こういった中、紀の川市の商工業が生き延びて発展していくためには、商工業者一人ひとりの「やる気」を喚起していかなければなりません。

私なりに紀の川市の商工業発展にむけていくつかの提案をさせていただきます。

第一が、紀の川市の基幹産業である農業との連携です。

紀の川市は、全国有数の果物生産を誇る果物王国です。日本一のファーマーズマーケット・めっけもん広場もあります。せっかく近くで安全・安心な農産物が生産されているのですから、この立地条件を活用しない手はありません。

紀の川市産の農産物の加工・販売を紀の川市の商工業者が担うことで農商工の連携、農業の六次産業化を進める絶好の環境があると言えます。

最近お隣の和歌山市でＪＡと商工会議所、市農業

委員会が連携して、「生姜丸しぼりジンジャーエール」が開発されました。和歌山市特産のしょうがを活用した健康飲料ということで全国に出荷し人気を博しています。

紀の川市でも、ＪＡ紀の里と商工会が連携すれば、豊富な紀の川市産の果物、例えば、桃、柿、はっさく、黒豆などを活用したお菓子や飲料を農商工連携の枠組みの中で開発できるはずです。

また、その際に着目していただきたいのは、紀の川市のブランドとしての「食育」です。

平成二二年一二月議会で、近畿初となる「食育のまち」宣言が議決されました。また、平成二二年度から三年間、県の「わがまち元気プロジェクト」の助成を受けて、農商工連携の枠組みの中で加工品の開発を検討する予定です。

この加工品に関しては「食育」へのこだわりを徹底していただきたいと考えています。商品のパッ

ケージに食事バランスガイドに基づいたカロリー計算を入れるなど栄養バランスも考えたものであれば、「食育のまち紀の川市」の良いイメージと連動して、必ずヒット商品になると思います。

「はっさくプーロ」など従来から商工会でつくられてきた加工品も大切にしながら、「紀の川ふるふる娘」を活用した新しい「食育のまち紀の川市」らしい商品の開発を、農業との連携の中で取り組んでいただければと思います。

第二が、紀の川市にある観光資源の活用です。

紀の川市にはたくさんのお客さんの観光資源があります。これらの資源との連携を通じて、市内の商工業の発展を促していきたいですね。

J A紀の里めつけもん広場に来られるお客さんは八〇万人いるそうです。これはレジ通過者だけの人数です。実際にはその数倍もあるということです。

このお客さん達を何割かでも引き留めて紀の川市でお金を落としてもらう仕掛けをつくることを考えていきたいものです。

貴志川線貴志駅の「たま」駅長も、全国区の人気を博していますし、桃の花が咲きほこる桃源郷、健康バイキングが人気の青洲の里など集客力のある観光交流施設の活用も考えていかなければなりません。例えば、各観光施設と商店街で連携したスタンプラリーなどを行うのも面白いかもしれませんね。

第三が、紀の川市の歴史・伝統文化に基づく資源の活用です。

紀の川市には、国宝が二つあるのを「ご存じでしたか？粉河寺の草創を描いた粉河寺縁起絵巻と、とちがち八幡神社にある沃懸地螺鈿金銅装神輿はちまんです。

平成二二年現在、国宝の存在しない県が三県（群馬・徳島・宮崎）あることからみても、紀の川市は、

深い歴史を背景とした文化財の宝庫といってもいいと思います。

平成二〇年粉河とんまか通りに粉河寺縁起絵巻などを描いた

モニュメントを制作したのも、粉河寺に来ていただいたお客様に商店街も歩いてもらおうということがきっかけでした。

また、粉河酢などのように、今は途絶えてしまっただけでかつて全国区のブランドを誇っていた特産品もあります。こういった資源を発掘し活用することが、商工業の振興にもつながっていくのではないのでしょうか。

平成三二年二月、紀の川市商工会が事務局に



粉河寺

粉河寺は、西国三十三箇所観音霊場第三番札所として名高く、全国から多くの観光客が訪れます。

なつて「粉河」に関する知識の検定を行う「粉河検定」がスタートしました。紀の川市の歴史・文化などを楽しみながら市民に覚えてもらうという意味で、大変意義のあることだと思っています。将来的に「紀の川市検定」まで発展させていく考えをもっておられると聞いています。今後の取組の進展を期待しています。

第四が、商工業版「地産地消」の推進です。

従来、紀の川市では農業の潤いが商工業者に恩恵をもたらしてきました。たとえば、はつさくや桃で稼いだ



粉河検定

平成 22 年 11 月「粉河検定」がスタートしました。粉河の歴史・文化を楽しみながら覚えてもらうこの取組は、将来的に「紀の川市検定」に発展させていく予定です。

写真提供：紀の川市商工会





紀の川市商工会
会長
大西洋太郎さん

一紀の川市の商工業活性化に向けて商工会の役割は？一

商工業活性化に向けて商工会の役割は大きく、行政と連携して市内商工業者のために汗をかいていきたいと思っています。

紀の川市の商工業は、農業とともに発展してきました。これからも JA 紀の里等と協力して、めっけもん広場とスタンプラリーでの連携や市内農産物の加工品開発を考えていきたいですね。

固定観念を打破して、若手など様々な人の意見を聞くことも重要です。商工会で特産品を公募したところ、「鞆渕黒豆せんべい」や「紀の川ぷるぷるゼリー」などの提案がありました。

紀の川市の歴史文化を見直していくことも大切です。昨年 11 月に実施した「粉河検定」を、将来は「紀の川市検定」に発展させていきたいと考えています。

固定観念を打破して、若手などの意見を聞くことも重要です。

農家は、市内の商工業者に家財道具その他の発注をし、景気が市内で巡回していました。しかし今、農家が仮に儲けても、市内の商工業者に必ずしも還元されない傾向ができています。

農家をはじめ紀の川市民に市内商工業者を利用し

てもらった工夫が必要です。商工業版「めっけもん広場」といってべき仕組みをつくるのができないでしょうか。

紀の川市民に紀の川市の商店街で買い物をしてもらって、紀の川市でつくった工業製品をつかってもら

う：：これは、商品・工業製品の移動にかかる化石燃料が少なくなりますので、地球環境にもやさしい取組になります。

◆ピンチをチャンスに

言うまでもなく、紀の川市の商工業を発展させていくべき主体は、市の行政でも商工会でもなく市内商工業者の皆さんです。

リーマンショック以降の不景気の中、商工業者の皆さんが「やる気」を出すのは難しいかもしれませんが。しかし、現在の状況を活かして、ピンチをチャンスに変えていけるのは皆さんの力しかありません。今後とも、市行政と商工会が連携して、紀の川市の商工業を盛り立てていきたいと考えています。

本日は、ご静聴ありがとうございました。

（平成二三年二月四日 紀の川市商工会理事会講演）

(十四)『きのかわ—人と水の物語—』

～総括にかえて～

果物王国・紀の川市の農業を支えているのは、何といっても「水」です。この「水」がどこからきているのか皆さんはご存じですか？

紀の川市の水を育んでいるのは、市内や近隣の山々、紀の川上流域、十津川流域などにある水源林です。そして、水源林からもたらされる水を確保するために、たくさん水路やため池などがつくられてきました。

徳川頼宣がつくらせた桜池、大畑才蔵がつくった小田井用水、華岡青洲がつくった垣内池のほか、瀬の用水路「ホリキリ」のように、名もない人々によってつくられたものもあります。

『きのかわ—人と水の物語—』は、こういった水源林、水路、ため池など「水」に関わる様々な物語を、

市内の中学校生徒の副読本としてまとめたものです。

市教育委員会と農林商工部が協力して検討委員会を設置し、中学校の社会科の先生たちに手分けして執筆してもらいました。県立博物館の高木徳郎学芸員（現・早稲田大学准教授）にも、時代考証をチェックしていただきました。

この本で、市内の子ども達が、紀の川市で先人たちの残してきた足跡をたどり、その歴史に誇りをもってもらえればと考えています。



『きのかわ—人と水の物語—』

『きのかわ—人と水の物語—』は、紀の川市の先人がつくってきた水源林、水路、ため池など「水」にかかわる様々な物語を、中学生の副読本としてまとめたものです。



『恵みの源』

『恵みの源』は、シンポジウム『棚田のルーツを探る』の記録とあわせて、紀の川市内で受け継がれてきたため池、水路など「紀の川市の宝物」を紹介しています。

『きのかわ―人と水の物語―』は、紀の川市に残る素晴らしい「宝物」を、紀の川市の子ども達に伝えていかなければいけないという思いで企画させていただきました。いただいたものです。（四）棚田のルーツを探る」でご紹介した『恵みの源』とあわせて、紀の川市の素晴らしさを知るきっかけにさせていただければ幸いです。

なお、『きのかわ―人と水の物語―』と『恵みの源』の二冊は、農地課の担当職員が、強い熱意をもって編集作業を担当してくれました。彼らの力がなければ

ばこれほど良い冊子にはならなかったと、感謝しています。この二冊は、付属CDのPDFをご覧ください（CDコンテンツ編⑪、⑫）

また、この二冊とも、高木徳郎さんの絶大な支援をいただき完成することができました。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。